



始



特109
46



二葉亭主人譯
春陽堂發行

大正
5. 12. 26
内交

| | | |
|-------|--------|-----|
| 片戀 | ツルゲネーフ | 一 |
| ふさぎの蟲 | ゴリリキイ | 一三三 |
| 奇遇 | ツルゲネーフ | 二五五 |
| 二狂人 | ゴリリキイ | 三二七 |
| あひゞき | ツルゲネーフ | 三九三 |
| 四日間 | ガルシン | 四一五 |
| 露助の妻 | 二葉亭 | 四四五 |

片戀 (ツルゲネーフ)

(2)

恰ど私の二十五の時でした、と某といふ男が話し出した、ですから最う餘程以前前の事です。私も漸く自由の利く身となつたので、そこで早速外國へ出掛けましたが、それも當時能く人の言つた教育完成のためではないので、唯何となく浮世の態が見たかつたので、其頃はまだ壯健でもあつたし、若くもあつたし、氣は浮いて面白いに、金も未だ亡くならず、それに是と定つて心配すべき事もなかつたので、前後の考もなく、仕度放題を仕散らして、早く云へば、先づ花の咲いたやうな境涯でした。一體人といふものは草木と違ふから、永く花を持つことは出来ないものであるが、其頃は未だそんな事には頓と氣が附きませんでした。何でも若い時には彩色をした餅を喰べて、これがその命を繋ぐ麵包である、などと思つてゐるものだが、聽て其時節が來れば麵包の片塊をも強求つて喰べるようになります。けれども今此

處でそんな事を言出しては仕様がなすが。

そこで、私は何の目的が有るでもなく、計畫もなく、唯心に適つた所なら、何處にでも逗留する、新しい面が見たくなれば、直ぐ出立するといふ調子で旅行をしました——新しい面を見たくなればといふのは實際の事で、私には人間の外は何も面白くなかつた。珍らしい記念碑とか、有名な陳列所とかいふものは甚い嫌で、例のローンラカイ(傭男)などいふ者は、面を見たばかりでも、氣色に障つて悶々とする位であつたから、ドレスデンのグリーンネ、ゲウオルベ(美術品陳列所)では狂人じみる程でした。尤も自然には随分深く感じる方であつたが、自然の美とかいふ、山でも、岩でも、瀑布でも、何でも可いが、尋常たものでないものは、人に纏綿つて長閑にはさして置かぬやうな所があるので、それで好きませんでした。その代り人の面ですな、生きてゐる人の面——言葉にしる、所作にしる、笑聲にしる同じ事だが——是は私に取つては無くて叶はぬもので、群聚に交つてゐれば、いつも氣が晴れ

(3)

て愉快になる。人の行く方へ行つたり、人の喚くのに連れて喚いたりするのも面白いが、人の喚くのを見ても面白い。人を観察して楽しむ……と云つて強ち観察するのでもなく、唯まじりく見てゐるのであるが、それが又妙に面白くて、頓と飽くといふことを忘れて了ふ。ほい、また話が逸れた。

そこで二十年ばかり前に、ラインの左岸の某といふ小さな町に逗留してゐた事がありました。少し世間を離れてゐたかつた、といふものは、その少し前に温泉場である若後家と知己になつて、其女に痛い目に逢されました。女といふのは、なかなかの美人で、才氣もあつて誰とでも戯ける——私も其手玉に取られた一人です。初の内は大きな氣を持たせられたが、其後海軍大尉だとかいふ、頬の赤いバワリヤの男に見代へられて、思ふさま熱湯を飲ませられた。實は湯傷と云つても、さしたる事もなかつたが、何だか少しの間は悲しい面をして、世間を遠かつてゐなければならぬやうな氣がして——若い時は何を爲たつて氣が休まりまさあ——それでその

某といふ小さな町に宿を取つてゐました。

此町は小高い丘の二ツ並んだ裾に在つて、壁も塔も古びて、百年も経つた菩提樹もあれば、ラインへ注ぐ清いな小河に急な橋も架つてゐて、風景の佳い處であつたから、氣に入りました——殊に葡萄酒の佳いのが氣に入りました。日が暮れると(六月の事であつたから)、髪の毛に白ほい光澤を持つた獨逸の婦人が狭い町を漫歩きして、外國人に逢へば艶いた聲で Guten Abend (今晚は) など、云ふ。月が古い家の尖つた屋根を出て、路上の小砂利が寂寞とした光の中に劃然際取つて見えるころまで、尙ほちらほら人影がする。その時分町を散歩すると、快い心地ですわい、澄澄渡つた空からは月が餘念なく町を眺めてゐると、町はまた其を承知してゐながら、森とした中にも何處か人を誘ふやうな處もある月の光を浴び、鳴を静めて控へてゐる。高いゴチック風の鐘樓の屋の棟では、金雞が蒼味の有る金色を放つてゐれば、薄光りのする河面にも、同じ色の光線が横に流れてゐる。板石葺の家の小窓には(雅逸人

は皆儉約だから、細い蠟燭が心細く黠つてゐる。葡萄の蔓が石垣越に曲つた頭を密と出してゐる。菱形の廣場の古井戸の邊で、何か物陰を駆通ると、夜番の睡さうな口笛の音もすれば、氣の善い犬も低く唸る。風は面を撫るやうに吹く、菩提樹の佳い香が紛々と鼻を撲つて、息氣までが自ら深くなる。そこでグレートヘン(獨逸美人)といふ語が——感嘆の調子でもなく、疑問の調子でもなくて——我知らず口へ出さうになる。

ラインまでは此町から半里もありましたらう。能く出掛けて往つては河の壯大な景色を眺めたり、少しは無理にする氣味も有つて、例の人惡な後家さまの事を思つたりなどしながら、大きな一本立の秦皮の根方に据てあつた石の床几に腰を掛けて、時の移るのを忘れてゐた事も有りましたが、その秦皮の枝の間からは、悲しさうな小兒めいた面相のマドンナの像が覗いてゐて、對岸には某といふ町が見えます、是は私の逗留してゐた町よりは少し大きな町で。或る夕暮に、私は例の氣に入り

の床几に腰を掛けて空を眺めたり、河面を眺めたり、又は葡萄園を眺めたりしてゐました。鼻の先では、河岸へ引揚げて、松脂を塗た腹を空にして伏せてあつた小舟へ、頭髮の白ほい小兒が這上つて遊んでゐます。河面には小形の舟が帆に緩く風を孕むで靜に駛つて行くので、青々とした水面に纒ばかり白波が起つて、涼々といふ音が微にする。ふと音樂の調が聞こえたから、耳を澄まして聴いてみると、某町でワリス英語にいふワを奏つてゐるので。コントラバース樂器の名の籠つた音が斷續して聞こえれば、ヴァイオリンの音も幽にして、盛に笛を吹いてゐる。

「何だらう、あれは？」と傍へ來た、ブリース毛織物の名の胴服を着て、青色の靴足袋に扣金附の半靴を穿いた老人に訊ねると、その老人は先づバイブを左から右へ脚直して、

「ありや何で御座りますよ。大學の書生さん達が某處からコンメルシを爲に來たので。」

「見に行かう。恰どまだ其町へは往つた事がないから、」とかう思つて、私が渡守を尋ねて、對岸へ渡して貰ひました。

二

コンメルシといふものは如何なものだか、未だ御存じない方も有るでせうが、これは一種の祝宴で、おなじ土地の學生が寄集まつて學生組合(Landsmannschaft)といふものを組織してゐる、その集會です。このコンメルシに參會する者は大抵昔から獨逸の學生風に定つてゐる服装をして居るもので、ウェンゲルカの上衣を着て、大長靴を穿いて、何か定つた色の抹額を附けた小形の帽子を冠つてゐます。通例セニヨールと云つて組合長がある、それを幹事にして晚餐を喫べに集つて、酒を飲むやら、Landesvater, Gaudeamusなど、いふ歌を唱ふやら、煙草を吹かすやら、悪口を吐合ふやらして、徹夜騒ぐ。時としては樂師などを聘することも有ります。

恰ど斯ういふコンメルシが、某町の太陽の招牌を掲げたホテルの、往來へ向いた庭で催されたので。見ればホテルの屋根にも庭先にも、旌旗を風に吹靡かして、學生達は刈込をした菩提樹の蔭に食卓を並べて坐つてゐる光景で、一ツの食卓の下には大な猛犬までが臥てゐます、其處を少し離れて長春藤の亭が在て、其内では樂師が熱心になつて、樂を奏してゐたが、をりく、麥酒を仰つては勢を添けなどしてゐます、庭の四圍は低い垣で、其外には見物が黒山のやうに環視してゐます。他所者は珍らしいので、何でも一ツ視て放樂をしようといふ了簡なのでせう。私も矢張見物の中に交つてゐました。學生の面を視てゐると、何となく面白くなります。抱合つたり、喚いたり、邪氣なく戯けたり、眼の内を爛々に光らしたり、謂なく笑つたり――世の中に此程心地の快い笑方は有るまいが――笑つたりなどする、若い鮮いだ心が面白さうに騒立つ、何處へでも可い、唯前へ進みさへすれば可いといふ意氣込の破裂する、罪の無い遊を視てゐると、何時か此方の心もそれに動かされて、如何

やら浮々し出して、此連中に加はらうかとまで思ひました。すると背後の方で、

「アーシア、最う行かうか？」

と露西亞語で物を言つた者がある、男の聲で。

「最う少時。」

と女の聲で答へる、是も矢張露西亞語で。

ついと振向いてみると……寛濶したクルトカの上衣を着て、フラーシカの帽子を冠つた若い紳士が眼に入つた。中脊の令嬢が其紳士の腕に憑れてゐたが、面は麥藁帽子に隠れて半分は見えなかつた。

「貴君は露西亞の方ですか？」

と我知らず口を滑らすと、紳士は微笑を漏らして、

「然うです。」

「これは意外な……こんな田舎で……」

「私共も實に意外です。が、宜しいぢや御座いせんか？ 幸です。お知己になりませう。私はガキンと申す者で。これは私の……と少し言淀むで、妹です。御姓名は？」

私も名告をして、それから種々談話をしましたが、此紳士も私同様氣散じの旅行序でに、一週間ばかり前に此町へ来て、此處に足を留めたのださうで。實は私は外國で露西亞の者と相識になるのを餘り好みませぬ。露西亞の者か然うでないかは、遠方から望ても、歩行つきや衣服の裁方で判るが、殊に面色で判る。平生は得々として人を嘲けるは愚か、動もすれば勿體ぶらうとする程の面色が、俄に悸々した心配さうな面色となつて……人間が急に注意の塊となる、眼をきよとくさせる……

「失敗つた！ 馬鹿な事を言つたのでないか、人が嗤つてゐるのではないか？」と
そのきよろつく眼が言ひさうである……かと思へば、少し経てば、また舊に復つて

勿體ぶる、尤もをりくは鈍な怪訝な面色をすることもあるが。兎に角私は露西亞の者とさへ云へば避けるようにしてゐたが、このガギンばかりは頭から氣に入りました。世には随分得な面相の人もあるもので、誰にしる其人の面を見ると快い心地になる、何となく温まるやうな、撫すられるやうな心地になる。ガギンも恰ど然うした面相の男で、賑然で、愛くるしい、それに大きい、柔しい眼で、軟かな縮毛で、物の言振にも愛嬌を持つてゐるので、顔は見ぬでも、聲を聞いたばかりで、微笑してゐるのが知れる程である。

ガギンの妹といふのも、一目見るからなかく美しいと思ひました。淺黒で、圓顔で、小さな徹つた鼻で、殆ど小兒の如うな頬をした、黒眼勝な清しい眼付の娘であつたが、其面相には何處か特色が有つて、姿も美しかつたが、未だ何となく發育し了らないやうにも見えませんでした。兄には少しも似てゐません。

ガギンは私に向つて、

「私共へお出でなさらんか？ 最う見てゐてもつまりますまい。これが國の者なら、玻璃を壊したり、椅子を破したりするのでせうが、此人達はえらい温順しい、如何だい、アーシヤ、もう歸らうか？」

妹は頷いて同意しました。

ガギンは尙ほ言葉を續いで、

「宿は町盡頭です。葡萄園の中の一軒家ですが、高臺で、随分景色は佳しい方で。まあお出でなすつて御覽なさい。主婦さんが酸乳を用意して置く筈です。もう程なく暮るでせうから、月が出てから、渡をお渡りになつた方が可いでせう。」

そこで、連立つて出掛けました。町の低い門を潜つて（此町は小石を塗込めた古い壁で、四方を取圍むであつたが、砲孔などは昔の儘で、未だ頽れずにある處もありました）低い門を潜つて、それから田圃へ出て、石垣に沿うて約を百歩ばかりして狭い角門の前で停歩りました。ガギンは其角門を開けて、先へ立つて案内をしなが

ら急な徑を高臺へ上つて行きます。右左の突出た處には葡萄が植ゑてあつたが、今しがた入つた日の赤々として覺束ない光が、青い蔓にも、細長い添木にも、匾平な石が大小入雜つて一面に散亂つた、乾燥いだ地面にも、今上つて行く高臺の、黒々と見える横木を斜に渡して、明るい窓を四所に開けた小さな家の白壁にも映いてゐます。

その小さな家の傍まで来ると、ガギンが「これが宿です。それ其處へ乳を持つて行くのが主婦さんで。Guten Abend, Madame 今晩は。直ぐ喫ることにしませう。が、まア御覽なさい……佳い景色でせう。」

成程絶景であつた。眼下には兩岸の翠色滴るばかりの中を、ラインが銀を延べたやうに流れてゐて、一所入日を受けて、赤味が、つた金色を放つてゐる所がある。町は潜むだやうに岸に引添いて、家も往來も手に取るやうに見えて、そこらに丘やら野やらが渺茫と見渡される。瞰下しても佳かつたが、向上れば尙ほ快つた。

その中にも空の底深く澄むだところ、空氣の明るく瑩徹るところは、眼も覺めるばかりで。そのまた空氣が涼しい上に軽くて、微に揺れては、そよくと吹渡るところは、宛で場處が高いから、伸々すると云つたやうな鹽梅である。

「結構なお宿ですな！」

「妹が見附けたのです、」と云つてガギンは妹を顧みて、「ねえ、アーシヤ、お前に一ツ世話を焼いて貰はう。皆此處へ運ばせてお呉れ。外で喫らう。彼所の方が音楽も善く聞こえさうだ。更に私に向つて、「何ですな、ワリスといふ奴は傍で聽いては仕様のないものですな——厭な、粗い音がするばかりで。けれども遠方で聽いてゐると妙ですて、何だか斯う胸にロマンチックの線でもあつて、それに觸られるやうな鹽梅で。」

アーシヤ（アンナといふのが本名ではあるが、ガギンはアーシヤとばかり云ひますから、私にも然う云はせて戴かう）アーシヤは家内へ入つたが、聽て主婦さんと

二人して、廣蓋に乳入、皿、匙、砂糖、菓物、麵包などを載せたのを持って出て來ました。そこで銘々座に着いて晚餐を始めました。その時アーシャが帽子を脱つたのを見ると、黒々とした頭髪であつたが、斷方も撫付様もまだ小娘風で、環毛にしてふつさりとした耳や領へ垂らしてゐました。初めの内は何となく含羞むでゐたので、兄が「アーシャ、そんなに小さくなつて居らんでも可よ。お客様は喰付はなさらないよ。」といふと、自分も微笑したが、それから少時経つと、もう自分から進むで私と談話を爲しました。私は此娘ほどちよこまかするものを見たことはありません。一分時と動かすには居ません。幾度となく起上つて、家内へ駈込むかと思へば、また駈出して來て、何か中音に唱つて、妄らに高笑をする、それも極く變な風で、耳に聞いた事を笑ふのではなく、心に浮ぶ種々の事を笑ふやうで、大きな眼で、憚る所なく正しく物を視るのが常であつたが、時としては眼を少し細めることもある、其時は眼差が急に柔しく奥床しくなる。

二時間ばかり閑話を爲してゐました。日は最う疾くに暮れて、四邊が初は眩いほど煌々してゐるが、其中にあかくと明るくなつて、遂に蒼ざめて、薄闇くなつて、見る／＼夜に移り行けれど、談話は四邊の空氣の如うに、穩な蕭然した調子で、なか／＼斷えません。ラインワインを一罇取寄せて、それをガギンと二人して悠々と飲合ひました。まだ音楽が聞こえてゐるが、其音色は前よりは微妙に聞こえました。火影が町にも河面にも點々と見えます。アーシャは捲髮の眼に振懸るほど急に首垂れて、黙つて了つて、廳で太息を吐いて、睡くなつたと云つて、家内へ入ひつたが其癖良久らくの間、燭火をも點けずに、鎖切つた窓の彼方に立在むでゐるのが見えました。兎角する内に月が出て其影がラインに流れると、四邊は明るくなつた處もあれば、まだまやくとした處もあつて、宛然別世界のやうになる。二人が飲ひでゐるた多角形のコップの中の葡萄酒までが幽妙の光を放つて來る。風は禽ならば翼を戦めたやうに靜まつて、そよとも音を立てない。地は生暖かな夜氣をほかくと吐

(18)

く。

「最うお暇を爲ませう。踟躕してゐると、船頭が見附からんかも知れませんから。」
「ですか。」

ガギンと連立つて徑を下りて行くと、ふと後の方から小砂利を蹴散らして駈けて来る者がある。見ればアーシヤで。

「お前まだ寝ないのか？」と兄が云つたが、それには返答をもせず、二人の側を摺抜けて駈けて行く。ホテルの庭では學生達が黠した名残の燈明が消々になつて、植木の葉裏を照らすので、木の葉は祭日の作物か何かのやうに見える。河岸でアーシヤに出會つたが、アーシヤは何か船頭と談話を爲てゐました。小舟へ飛乗つて、此新知の人々に告別すると、ガギンは翌日遊びに來ようといふ。私は其手を握つて、更にアーシヤの方へ手を出してみたが、アーシヤは唯私の面をぢろりと視たばかりで、頭振を振つて居ます。舟は岸を離れると其儘さつと流される。元氣な老船頭

は重さうに權を薄闇い水中へ投ずる。

「そら月の中へお入んなすつた。そらお出なすつた。」とアーシヤが聲を掛ける。水面を覗いてみると、薄黒い浪が舟を取捲いて騒いでゐるばかりです。

「さやうなら。」とまたアーシヤの聲が響く。

「明日また。」とガギンの聲もしました。

舟が着いたから、岸へ上つて振向いて見たが、最う對岸には誰もゐない。また月影が河面に横はつて燦々と見え出す。古風なランネルのワリスの調が跡を慕つて河越に響いて来る。成程ガギンの云つた通りで、それを聞くと何となく物の懐かしくなつて、調子に連れて胸の線も鳴り出す。何處ともなく良い香のする空気を靜に吸ひながら、薄暗い野を通つて宿へ歸つて來ましたが、室へ入つた時は何と云つて目的もなく捉まへ所もないが、何か心待に待つてゐることがあるやうで、もだくだとして心地よく蕩けてゐました。洵に幸福であるやうな心持がしました……何が幸福

(19)

だと云へば、何を希望してゐたのでもなく、何を思つてゐたのでもない……けれど
も唯何となく幸福であつたのだ。

快く擦ぐられるやうな氣がして耐らなかつたので、笑出さぬばかりになつて、臥
床へ潜込むで、其儘眼を瞑むらうとして、ふと憶出せば、今宵一夜かの難而い寡婦
さまの事を忘れてゐた……「これはしたり！ 惚れてゐるんぢやないか？」と我と
我心を異むでみたが、此不審は立てばなしにして置いて、搖籃に入れられた赤兒のや
うになつて、私はどうも眠入つたらしかつた。

三

翌朝最う眼が覺めては居たが、未だ床に居ると、窓下でごとくと杖を突鳴らし
て、こんな歌を唱ふ者が有る。

おん身は寐てか？

よしさらば、

おどろかさなむ

いとの音に……

ガギンの聲といふのは直ぐ知れたから、手捷く戸を開けると、

「お早うござんす」と云つて果してガギンが入つて来て、「早朝からお邪魔をします。

が、まア御覽なさい、實に心地が快くなるから。涼しくて、露が深くて、雲雀が鳴
いてゐる……」

艶やかな縮髪で、のんびりした領元をして、頬を薔薇色にしてゐる所を見れば、
當人の鮮かなことも、朝景色に譲らぬ程である。

衣服を更めてから、二人して庭へ出て、床几に掛つて、珈琲を取寄せて、それか
ら談話を始めました。其時ガギンの目的といふのを聞きましたが、此人は相應の財
産もあり、何を爲ようと氣儘の身の上であるから、畫を學ばうと思つてゐるのださ

うで。けれども思立ちやうが遅くて、多くの歳月を空に過したと云つて、それを深く悔いてゐました。私も同じく自分の志を語つて、事の序に例の不首尾な戀の始末をも打明けて話して了ひました。ガギンはそれに調子を合はさんではなかつたが、大に同情して呉れたとも見えません。愛想に二度ばかり太息を附合つて、さて宿へ来て自分の畫稿を覽て呉れぬかと云ふから、早速承知しました。

ガギンの宿へ往つて見ると、アーシヤは留守です。主婦さんの話では「お城趾へ」往つたのだと云ふ。某町から半里ばかりの處に封建時代の城趾が在つたので。ガギンは有るだけの畫稿を盡く出して見せました。此人の畫稿にはなかく生氣もあれば、眞に通る所もあつて、筆の運びも何となく自在であつたが、一ツとして畫上げたものはなく、而も其畫風には何處やら取締のない、心元ない所もあるやうに思はれたから、思ふ所を明白に云ふと、ガギンも歎息して、

「然うです、仰しやる如りです。どれも皆拙い、稚いものだ。けれども如何も仕方

がないですよ。確乎習つたことがないのに、それにスラウヤン人種の特性だといふが、例の放縱の氣に克てない、仕事を想像してゐる内は、鷲の翔るやうな勢ひでもつて、大地をも動がしかねぬ意氣込です——けれども、卒仕事に着手となると、直ぐ根氣が盡きて閉口して了ふ。

勵まさうとしてみたが、ガギンは手眞似で以て、到底も駄目だといふ意を見せて、而して畫稿を掻集めて、長椅子の上へ放下して、口の中で、

「若し十分に忍耐力が有つたら、私のやうな者でも、如何にかなるでせう。けれども忍耐が足らぬければ、何年経つても、到底も物にはなりません。それよりかアーシヤでも探して來ませう。」

二人連立つて出掛けました。

四

片

戀

城趾へは樹木の生茂つた狭い谷間の、曲折つた岨道を通つて行くのであるが、谷底には小さな河が流れてゐる。その河水が岩石を躍越え、凄まじい音を立て、流れて行くところは、連山の截断つたやうに急に断えた彼方に、汪洋として光つてゐる大河へ流注まうと云つて、焦心してゐるやうに見える。ガギンは面白く日の當つた所を二三箇所指して見せたが、成程其説明には畫家でないまでも、確に美術家らしい所は有りました。程なく城趾が見える。裸岩の上に四角な塔が儼然と聳えてゐる、一面に黒むで、割たやうに横に裂目が入つてはゐるが、未だなかく堅固なものである。苔蒸した壁が其裾を隠して、所々に葛が這纏つて、曲むだ材木が古びた砲臺からも、頼れた圓蓋からも落懸つてゐる。城門は今だに昔の佛を留めてゐるが、其處へは石の徑が通いてゐる。私共が其門際まで来た時、行先に女の姿が瞥と見えたかと思ふと、其女は何やら壞物の堆積つた上を、疾風の如く斷通つて、城壁の斗出た所へ登つて了つた、そのついで下は千仞の谷底である。

それを見てガギンが「アーシヤだ。寢然狂人だ。」

門を入ると、其處は狭い空地で、野生の林檎の樹や蕁麻などが生茂つて半分を塞いでゐる。壁の斗出た所に、果してアーシヤが蹲踞つてゐます。此方を振向いて笑出したが、其處を離れようともしません。兄は手眞似で恐喝して見せたばかりで有つたが、私は大聲にその亂暴を咎めると、

「打捨てお置きなさい」と兄が小聲で止める、「逆らつては不可、貴君は未だ御存じないんだが、彼女はまだく塔へも登りかねません。それよりか先ア一寸あれを御覽、此地の人もなかく如才が無いて。」

言はれて振返つて見ると、片隅に小さな板屋が在つて、其内で老婆が靴足袋を編みながら、眼鏡越しに吾々を見てゐます。これは旅人を相手に麥酒、生姜餅、ゼリツエ、ル水などを鬻いでゐる老婆で、私共は其所の店頭で休むで、錫の重い水香で可なり冷たい麥酒を飲むでゐました。アーシヤは頭をモスリンの頸巻で包むで、足を一所

に寄せて、身動をもせず、尙ほ蹲踞つてゐます。美しい横顔が晴れた空に劃然際取つて見える、けれども私はそれを見ると、何となく不快を感じた、尤も昨日から此娘の舉動には何處ともなく無理な自然らしくない處のあるのに心附いてはるました。だが……其時も心中で「我儕を驚かさうと思つてゐるのだな。馬鹿な真似をする女だ。お轉婆も斯うなると、小兒じみてゐる」と嘲つてゐると、アーシヤも然うと悟つたやうに、ふつと振返つて、私の面を凝然と諦視て、又高笑をした。それから二飛ばかりに壁を飛降りて、老婆の側へ来て、水を一杯と無心しました。

兄を顧みて「私が飲むんだと思つて？ 然うぢやないの。彼壁の上に花が咲いてゐるから、水を遣らないと不可と思つて。」

けれどもガギンは何とも返答をしなかつた。アーシヤは片手に水香を持つて、壁へ攀上りはじめ、をりく停止つて屈むでは、可異い程の真顔をして、水を幾滴か覆して日に燦めかせる、其所作が可愛らしくないでは無つたが、私は尙ほ笑止らし

く思つた、尤も其身軽なことに感ぜずには居られなかつたが。と或る危ない處へ来て、アーシヤは故意とらしく聲を立て、さて高く笑つた……愈以て笑止らしくなつた。

「宛然山羊の這上るやうだ、」と獨言のやうに云つて老婆も、暫らく靴足袋を膝の上に置きました。

兎角する内にアーシヤは水香の水を傾盡して、體を揺てしやならくと戻つて來たが、怪しく微笑して眉や鼻や唇を歪めて、浮々してゐる中にも、何處か傍若無人な様子も有つて、眼を細くしてゐる。

「貴君は見ともない事をすると思つて居らつしやるでせうが、私は關はないわ、何でも貴君は私の風を見て楽しむで居らつしやるに違ひないから、」と其顔が云ひさうに思はれる。

「アーシヤは身軽だ、なか／＼身軽だ、」とガギンが云つた。

するとアーシヤはふと何か羞入つたやうで、長い睫毛を垂れて、悪い事でも爲たやうに、小さくなつて私共の側に坐つた。其時始めてアーシヤの面を熟く視ることが出来たが、世に是程變り易い面は恐らく又とあるまい。一瞬の間に最う蒼ざめて了つて、何か物思はしさうな、殆ど悲しさうな面色となつたのみならず、思做でもあらうが、其面相も大きく嚴めしくなつて、艶も素氣も亡くなつて了つた。全然温順しくなつて了つた。それから連立つて城趾を視廻つて（勿論アーシヤも跡に隨いて来たが、景色を眺めなどしてゐる中に、飯時近くなる。茶店へ戻つて勘定を爲ると云つて、ガギンが復麥酒を一杯持て來させて、可異な眼付をして私の面を視ながら、

「貴君の戀人の健康を祝して。」

するとアーシヤが突然。

「此方には——貴君にはそんな方がお在なさるの？」

「誰にだつて在るさ、」とガギンが答へた。

アーシヤは少時沈吟してゐたが、其内にまた面色が變つて、また嘲けるやうな傍若無人な冷笑が顯れて來た。

歸路には愈高笑をして益戯ける、長い樹枝をへし折て、それを小銃のやうに擔いで、頸巻を頭に巻付けなどする。忘れもせんが、其時途で頭髮の光澤の白はい、氣取つた英國人の一群に出逢つたが、其連中は言合せたやうに、吃驚した素氣のないう面をして、眼鏡を加へ、アーシヤを目送るので、アーシヤは故意と大聲に歌を唱ひ出すといふ始末で、宿に歸るや否や、自分の室へ入つて了つたが、晝飯の時になつて漸く出て來たのを見ると、晴衣の中でも一番美のを着て來たらしく、頭髮も可憐に撫付けて、手袋まで穿めてゐる。卓に就いても、大層取澄して、殆ど氣取つてゐるのかと思はれる程で、食物には一寸口を着けたばかりで、只杯で水ばかり飲むでゐる。今までとは全で違つた、品の善い、氣高い令嬢になつて私に見せようと

いふ氣であつたのでせう。それでもガギンは些も干渉ひません。何な事でも大目に

見て置くのが習慣になつてゐたものと見えます。けれども唯時々氣の善い面をして私わたくしの面かほを視みては肩かたを蹙すぼめる、「まだ小兒こどもです。大目おほめに見みて遣やつて下ください」といはぬばかりで。さて飯めしが濟すむ。アーシヤは起たちあつて一寸會釋ちゆうかいをして、帽子ぼうしを冠かぶりながら、兄あにに對むかつて、フラウ、ルイゼの家とこへ遊あそびに行いつても可いかと聞きく。ガギンは相變あひかはらずとは云いふものゝ、此時このときばかりは少し狼狽らうたいした氣味きみも有あつて、微笑えいごうしながら、

「請許まがひて行いくとは珍めづらしいな、何故なぜ？ 退窟たいくつかい？」

「いゝえ、然さうぢや無ないですけれど、昨日きのふ最さいう約束やくそくをして了しまつたもんですから。それにお二人ふたりぎりの方が可いでせうと思おもつて、此方このかたが（と私わたくしを指さして）まだ何かお話はなしな

さる事こともあるでせうから。」

アーシヤは出でて行いつて了しましました。

後あとでガギンが私わたくしの眼めを避よけながら、

「フラウ、ルイゼといふのは舊もとと此町このまちの町長ちやうじやうをしてゐた者の妻さいだつたさうですが、

今は寡婦こわふで、人が好いいばかりで凡庸ぼんやうな老婆らふじんです。所ところが是これがまた非常ひじやうにアーシヤを愛あい敬けいする。アーシヤも兎角とかく下等かたがひの人間にんげんと相識あひかになりたがる、こんな癖くせも畢竟つひつ傲慢ごうまんから起おこるのでせうな。」

しばらく沈黙ちんもくしてゐて、「彼女は、御覽ごらんの通り、随分甘やかしてあるが、然しかし如何どうも仕様しやうが無いのですよ。私は如何どうな者ものに向むかつても壓制あつせいなどすることは出来できない性質せうしやうだが、彼女あなに向むかつては尙更なほさら出来できません、尤もつとも餘あまり酷こにも出来できない事情じやうきやうもあるでせう……」

私わたくしが黙だまつてゐたので、ガギンも談話だんわを變かへて了しましました。私は深ふかく此男このをとこを知しれば知る程ほど、どうも親したしみが増あつて來くる。此男このをとこの人ひとと爲なりは造作ぞうさくもなく解わかつたが、是こゝは純粹じゆんじゆの露西亞ろしや人で、正直しやうじきな、質樸しつぱくな男をとこであるが、唯惜たゞい事ことには、少し優長ゆうちやうで、氣力きりきが薄うすくて、情熱じやうねつが足りたりない。若わかいからと云いつて、意氣いきが壯さかんであるでもなく、唯温雅たゞしつやとしてゐるばかりである。極きよくて愛嬌あいけうが有あつて才氣さいきも有あるが、是こゝが成熟せいじよくしたら、如何どう

な者になるであらう。美術家になる……と自分では云つてゐるが、身を賣めて俺ま
 ずにも勉めなければ、美術家にはなれぬものである。けれども勉めるといふことは如
 何であらうかと思つて、密にガギンの舉動を窺へば、面相も優しく、言語も優雅で
 ある。いや、此男には勉められない、奮發せられないと斷念しました。けれども之を
 愛せずには居られません、魂が如何にも引寄せられるやうである。殆ど四時間ばかり
 といふもの、膝を交へて長椅子に掛つてゐたり、悠々と住宅の前を散歩したりして
 談話をしてゐましたが、此四時間ばかりの間に、二人の意氣は全く投合してしま
 した。

日は疾くに暮れて、既う歸る時刻と爲つたが、アーシヤはまだ歸つて來ません。

「氣隨な奴だなア！ まだ歸つて來ない。なんなら貴君を送つて行きませうか？」

然うすると序にフラウ、ルイゼの家へ寄つて、彼處に居るか、如何だか、聞いてみ
 ます。大した迂路でもないから」とガギンは云ふ。

そこで連立つて町へ出て、狭い曲折つた横町へ入つて、窓を二ツ並べて取つた、
 四階建の家の前で停歩つた。此家は上へ行けば行く程、餘計往來へ出張つた家で、
 古い彫物の飾が有つて、下階には太い柱が二本立つてゐる、家根は瓦葺で尖つてゐ
 て、四階目には嘴のやうな紋車が突出してゐて、宛然大きな鳥が屈身だやうな家であ
 る。

「アーシヤ！ 此家か？」

とガギンが大聲に云ふと、三階の燈火の射した窓がごとりと云つて、ぱつと開い
 て、アーシヤの面を出したのが薄々見えたが、其背後には齒の脱けた、眼のしよほ
 くした老婆の面も見えた。

アーシヤは姿致を作ながら、窓に肱を持せて、

「居ますよ。私は此家が大好！ 阿兄、之を呈けませう」と云つて風呂草を兄に投
 けて、

「私は阿兄の戀人の積よ。」

フラウ、ルイゼは笑ひ出した。

「某さんがお歸なされるよ、お前に挨拶を爲ると云つて、此處までお出なすつた。」

「眞實？ そんなら其を某さんに呈けて頂戴、私は直ぐ歸りますよ。」

と云つて窓を閉めたが、それから如何もフラウ、ルイゼに接吻したらしかつた。

ガギンは黙つて私に風呂草を贈すから、私も黙つてそれを受取つて、隠袋へ入れてさて渡場へ来て川越をしました。

忘れもしない、それから私は何を思つてゐたでも無いが、何か鬱々として宿へ歸つて來ると、不圖獨逸では珍らしいが、平生馴慣れた香がしたので、停歩つて四方を見廻すと、路傍に小さな麻圃が在つた。其淋しい香を嗅ぐと、ふと故郷の事が憶出されて、顔に懐かしくなる、急に露西亞の空氣を吸つて、露西亞の土を踏みたくなる。「一體此地で何を爲てゐるのだ？ 何も知らぬ他國へ來て、知らぬ人の中に交

つてゐる必要は無いではないか？」と口へ出して我と我を詰ると、今まで鬱々として氣を腐らしてゐたものが、急に口惜しくなつて、ざり／＼と氣が焦燥つて來る。宿へ歸つたときには、全たく昨日の心持はなく、憤々として多時は落着くことが出來なかつた。自分にも何が残念だか判らぬが、兎に角残念で／＼耐らぬ。良久らくしてから、座に着いて、ふと夫の人惡な寡婦さまの事を憶ひ出して（尤も毎日寢る時分には此女の事を憶ひ出すのが恒例となつてゐたのであるが）憶出して、其手紙を一通取出す。さて取出しは取出したが、まだ啓けて見ぬ内に、ふとまた氣が變つて……アーシヤの事を憶出す。ガギンが何やら露西亞へ歸り難い事情が有るやうに云つたが、それを憶出すと……「妹だか、何だか!?」とつい大きな聲が出た。

衣服を着更へて、臥床へ入つて、眠らうとしてみたが、眠られない。一時間も経つてから、床の上で起き直つて、枕に腕を持せながら、また「作つたやうな笑方をする我儘娘」の事を思つて、口の中で、「宛然ラファエーリの畫いたファルネジンのガ

ラテヤの小さいのだ。それも然うだが、必然妹ぢやない……」
 寡婦さまの手紙は床に落ちた儘で、月影に白く見えるばかりで、何時取上られるともなかつた。

五

翌朝また某町へ往きました。自分ではガギンに會たくなつた積でゐたが、内々
 はアーシヤが如何するであらうか、また昨日のやうに變な風をして見せようであらう
 か、それが見に往きたくなつたので。二人共客間に居たが、可異なこともあれば有
 るもので——昨夜も今朝も、露西亞の事はばかり懐續けてゐた故かして、アーシヤは
 全くの露西亞の娘、而も尋常の娘で、殆んど小間使か何かのやうに見える。故ほけ
 た衣服を着て、髪を耳の間へ撫込むで、端然として窓に對つて、刺繡を爲してゐたが、
 其風采の肅然と温順なことは、宛で今まで之より外に何も爲た事は無いと云つた

やうな風で、殆ど物を云はずに、沈着いて仕事を諦親て、難有味も素氣もない面色
 をしてゐるので、露西亞仕込のカーチャ、マーシヤんと云ふ程の事なりを憶ひ出す
 ともなく憶ひ出すと、聽て中音で「母さん、母さん」を語り出したから、彌々それ
 に違ふことになつた。私は其黄ばむだ、艶の抜けた、小さな面を見てゐると、不
 圖昨日の忘想を憶出して、何やら遺憾いやうな氣がしました。天氣は極く上天氣で
 あつたので、ガギンが寫生をしに行くと言ふから、私も同行しても可かと聞くと、
 「可いどころぢや無い。貴君の事なら、何ぞ善い忠告をして貰へるかも知れん。」
 ガギンは圓形の Van Dyck 風の帽子を冠つて、ブルーザの上衣を着て、紙挿を小脇
 に抱へて、出掛けるから、私も其跟に隨いて行きました。宿を出る時、ガギンが妹
 を顧みて、肉羹を餘り薄くないやうに調理へさせて置いて呉れろと云つたので、ア
 ーシヤも自身に廚房へ出て、氣を注げようと云つてゐました。此前も遊びに來たこ
 とのある例の谷まで來て、ガギンは石に腰を掛けて、枝を一杯に擲けた、虚だらけ

の、櫛の古木の寫生に著手だから、私は草の上に横臥んで、書物を取り出しは取出したが、二行とは讀續けず、ガギンも頻に紙を汚すのみで、二人とも唯饒舌てばかり居ます。如何いふ風に働かねばならぬとか、如何いふ事を避けて、如何いふ事を心懸けなければならぬとか、又は今の美術家は本來時勢と如何いふ關係を持つてゐるとかいふことを論ずるだけは随分巧に、微細な點まで論じたが、結局ガギンは今日は氣が乘らぬと諦めて丁つて、私と並んで横臥ぶ。さアそれからは最う誰に遠慮もなく、互に滔々と雄辯を揮つて、或は熱心になつたり、或は沈吟したり、又は感極つて泣かむとしたりしたが、談話は大方は意味の判然せぬ事で、尤も露西亞人といふ者はかうした談話が甚だ好であるが。散々饒舌て、欣然と自適して、何か一廉の仕遂けたやうな心地になつて、宿に歸つて見ると、アーシヤは毫も出た時と變らぬい、何程意を留めて見ても、露ほども厭味氣もなければ、少しも故意と風姿を作る氣色もなくて、今日ばかりは不自然と云つて咎めたくも、咎めやうがなかつた。

「は、ア！ 懺悔をして精進潔齋といふ態だな」とガギンも云つた位です。

晩になると、アーシヤは幾回となく心から欠びをして、早くから寢に往つたので私も程なく辭して宿に歸つて、最う何を妄想しなかつた、此日だけは一日眞面目で消しました。尤も、憶出せば、これから寢ようとする時、「宛然七面鳥のやうな娘だ」と我知らず口へ出して云つて、少し考へて、けれども如何しても妹ぢやない。

六

全二週間経ちました。私は毎日のやうにガギンの宿へ遊びに往きます。アーシヤは何か私を避けるようにします。相識になつた最初の二日は、彼程はしやいで大人を驚かしたものが、此頃は其様な動止は少しもない所か、何となく氣の浮かぬやうな、當惑したやうな、妙な面色をして前よりは笑ふことも少くなつたので、私も不審に思つて、密に其動止に氣を注げてゐました。

アーシャは佛蘭西語でも獨逸語でも隨分巧に談話をしたが、如何も婦人の手に成育た者らしくない、妙な、異常た、兄とは全く違ふ教育を受けたとは何かに就けて知れます。兄はVan Dyck風の帽を冠つて、ブルーザを着てゐても、如何にも溫和で、幾らか柔弱な處もあつて、何處までも大露西亞の士族らしかつたが、妹はどうも令嬢らしくない、總て所爲に何處か沈着が無くて、樹で云へば此頃接木をしたばかり、酒で云へば未だ醱酵中といふ氣味がある。天性小心で物羞をするのが癖であるので、自分でもその内氣なことを口惜く思つて、強て磊落に大膽にならうとはするものゝ、然うばかりも行きません。私は幾回となく此娘の未だ露西亞に居た頃の昔咄を爲かけて、種々誘をかけて見たが、浮とは口を解きません、唯外國へ出る前は久らく地方に居たといふ事だけは話しました。

或日アーシャ一人きりで書見をしてゐる所へ往合せましたが、兩手で頭を支へて、指を深く髪の毛に埋めて、一心に讀むでゐます。

側へ往つて、

「これは感心な

大層御勉強ですな。」

といふと、アーシャはふつと面を擧げて、眞顔になつて倍と私の面を凝視して、

「貴君は私を笑ふ外何も能がないと思召して？」

と云つて、突と起つて行かうとした……

書物の標題を見れば、何か佛蘭西の小説であるから、

「然し、こんな書物ぢや仕方がありませんね。」

「では何な書物なら可くつて？」と書物を机の上へ放下して、「それよりか矢張お轉婆でも爲て來ませう」と庭へ駈出して了つた。

其晩私がガギンにヘルマン、ウンド、ドロテアを朗讀して聞かせてゐると、アーシャは初は傍でちらちらしてゐるが、其内にふと立止つて、耳を傾けて、密と私の側に坐つて、終末まで聞いてゐました。それから其翌日になると、全く別人のや

うに爲つて了つたが、是はドロテアの如うに所帯じみた、眞面目な風にならうと氣紛れたのでせう。兎も角も奇怪な娘であつた。非常に負嫌の、何か此方で快く思はぬ事がある時でも、尙ほ何となく愛らしい娘であつた。唯私が親しめば親しむ程、疑なく思つたのは、此娘はガギンの妹でないといふ事だ。ガギンがアーシヤを遇らふ様子は兄妹らしくない、餘り柔しく、甘やかして過ぎてゐながら、何處か無理な處もある。

ふと奇異な事に出合つて、私の疑は殆ど霽れた、とサ思ひました。

或晩例の葡萄園へ来て見ると、門に鎖が下してある。熱くも考へずに、此前見附けて置いた垣の破目へ来て、其處を躍越した。其處から少し離れて、路傍にアカチヤで出来た小さな四阿屋がある。其四阿屋の傍を行過ぎようとする……ふとアーシヤが熱心になつて、泪ながらに、こんな事を云つてゐるのが聞えた。

「厭、厭、私は、貴方の外は誰の事を思ふのも厭。何と仰しやつても、貴方ばかり

の事を思つてゐたいわ——死でも思つてゐたいわ。」

するとガギンの聲で、

「最う措焉、アーシヤ、そんなに氣を揉まんが可い。余は汝のいふことを疑ぐりはせんよ。」

二人の聲は四阿屋の裡にする。私は絡合た木の枝を透して二人の姿を認め得たが、二人の者は私が居やうとは夢にも思はぬ様子であつた。

「貴方ばかりが宜わ」と重ねて云つて、アーシヤはガギンの領へ手を掛けて、啜上けて泣きながら、接吻して、犇とばかり抱付いた。

「措焉、分つたよ」と云つて、ガギンは軽とアーシヤの頭を撫でゝゐる。

私は少時立燈に燈むでゐた……が、ふと我に復る途端に、彼處へ往つたものかしら？……いや、如何してそんな事が！と頭の中で閃めく。足疾に垣まで引返して、それを躍越して、往來へ出て、殆ど斷出さぬばかりにして宿へ歸つて來た。歸つて

来て、微笑するやら、手を揉むやら、偶然した事で疑の霽れたのを(夢にも思違ひとは思はなかつたから)疑の霽れたのを奇異に思ふやらしてゐたが、其癖恨めしいは一通でない。心の中で「だが、假爲れば假爲られるものだなア! 然し何の爲にあんな真似を爲るんだらう? 余を欺いたとて、所益があるまい。こんな事を彼男が爲ようとは思ひ懸けなかつた……それに、如何だあの舌足るさは? ヘッ!」

七

其晩は寢苦しく明して、翌朝夙く起きて、背囊を負つて、宿の主婦さんには晩には歸らぬと云置いて、それから某町の傍を流れる河に沿いて、徒歩で山へ登りました。此山は犬が脊(Hundsruck)といふ山脈の分派で、珍らしい地質の山である、殊にそのバザリト層が雜物もなく、界目も正しくて妙であるが、然し今は地質の研究どころでは有りません。自分でも如何いふ心地になつたのか、善くも辨なかつた

が、唯二人の者と面を合せたくないと思つただけは確である。別に仔細と云つてはないが、唯彼等の卑劣なことを念ふと、口惜しくて耐らぬので、それで急に二人の者が厭はしくなつたのだと、自分では辯解してゐました。何の必要があつて、兄妹らしく見せかけて居るものか、更に判りません。けれども私は成るべく二人の事を念ふまいとして、山となく、谷となく彷徨ひ歩いて、或は飯屋の店に休むで、亭主や客と長閑に語合つたり、又は區平な暖な石に横臥で、雪の行くのを見送つたりしてゐましたが、幸ひ天氣は極く上天氣で、斯うして三日程を送りましたが、少しは面白いやうな氣もしました、尤も折々は鬱ぐこともあつたが、兎に角此邊の穩かな風土に相應しい心地になつてゐました。

果敢ない事が閑に眼前に移行くのを見てゐると、折に觸れて色々の感じがするから、それに身を任せてゐましたが、その感じが徐に逐ひつ逐はれつして、心の中を流れて去つた跡には、此三日間に觀たり、聞いたり、感じたりした所有ものを、一

ツに籠めた心地が残りました——處々の森の松脂の幽かな香やら、啄木鳥の啄く音やら、底の砂地にフォレーリ名の狂ふ清い流の暫くも断えぬ水音やら、さして峻しくもない山の姿やら、突兀たる岩石やら、尊氣な古寺や物舊りた樹立の見える清潔な村やら、野に下立つた鵲鳥やら、水車の眼まぐるしく回轉る洒落た粉磨場やら農夫の忠實な面やら、その水色のカムゾールの上衣やら、鼠色の靴足袋やら、肥えた馬の、或時は牝牛の軋ませて行く優長な荷車やら、林檎や梨子の樹を兩側に植ゑた清潔な路を若い長髪の旅人が行く姿やら、所有ものを籠めた心地が残りました……今ですら、其時の事を憶出すと、快くなります。獨逸の片田舎で、さして富裕な地とも見えなかつたが、其代り何處を見ても辛苦の痕、急かす氣永に勢力を加へた痕を留めて、善い處でした……どうぞ彼處だけは浮世の暴風に當てたくないものです。

宿に歸つたのは三日目の夕暮でした。まだ話し遺した事が有つた、私は二人の者

を快く思はぬ餘り、例の難面い寡婦さまの佛を心中に呼戻さうとして見たが、無駄でした。忘れもせぬ、私が此女の事を思はうとすると、五歳ばかりの農夫の娘が、邪氣ない眼を圓くして、物珍らしさうな、圓々した面をして、私の前に佇立りましたが、其娘がさも小兒々々した、罪のない風で私の面を凝視するので、その清い眼にも耻かしくなつて、如何もその前では偽りたく無く爲つたから、早速今迄の戀人の事は永く思棄て、了ひました。

宿にはガギンの手紙が届いてゐました。手紙には私の思立の唐突なのに驚いた事を彼を誘合さなかつたのを恨に思ふ事などが陳べてあつて、歸つたらば、直ぐ訪て貰ひたい、としてある。私は此手紙を見ると、何となく不快を感じたが、それでも翌日某町へ出かけました。

ガギンに逢へばさも懐かしさうで、種々恨を云つても、尙ほ親しみといふものを失はなかつたが、アーシヤは何だか意あつて爲た如うに、私の面を見ると、唐突に高笑をして、例の通り直ぐ駈出して行つて了りました。ガギンも極り悪く思つたと見えて、妹の後影を見送りながら、口の中で宛然で狂人だと云つて、私には詫を云ひました。實は私もアーシヤに對しては甚だ不満でした、いと不愉快である所を、またあんな故意とらしい笑方をして可怪な面色をする！けれども私は素知らぬ面をして、ほんの旅行の眞似事をした、その話をしてゐました、ガギンも私の留守中に爲た事の話をしたが、如何も話に氣が乗りません。アーシヤは座敷を出たり、入つたりしてゐます。そこで遂に私が急ぎの仕事が有るから、最う歸らなければならぬと云出すと、ガギンは初の内は引留めてゐるが、聽て凝然と私の面を諦視めて、それでは送つて行かうと云ふ。入口の間へ出ると、アーシヤが出つて来て、私の方へ手を出すから、私は軽く其指頭を握つて、一寸會釋をしました。それからガギン

と二人でラインを渡つて、マドンナの像の側の、例の氣に入りの秦皮の前を通らうとして、其處の床几に腰を掛けました。些と景色でも觀て行かうといふ積で、其時二人の間に妙な話が始まりました。

初の内は二言三言物を云つてみたが、果は互に黙つて了つて、河水の白々と光るのを眺めてゐると、

ガギンは例の莞爾々々としながら、ふと話しかけました。

「時に貴君はアーシヤを如何思ひますか？ すこし變に見えはしませんか？」

ガギンが正かアーシヤの事を云出しはすまいと思つてゐるから、私は少し當惑して、

「然うですな。」

「彼女の評をするなら、先づ性質から熱く知らんければ不可ですが、全體極く人は善いけれど、少し危険な女ですよ。だから随分持餘すことが有ります。然しさう云

つては、實は可哀さうなので、貴君は彼女の経歴を御存じないから、何だけれども……」

「経歴を？……でも彼方は何ぢやありませんか、貴君の……」

ガギンはチロリと私の面を見て、

「妹でないと思つてお出なさるんですか？ 然うぢやないんです（と私の狼狽する

には頓着せず言葉を繼いで）、全く妹で——異母の妹です。お話しれば、一體か

ういふ譯で、私は貴君を信ずるから、總て打開けてお話しして下さうが、

私の父といふのは極く人の善い人で、随分物も解つてゐたし、教育もあつたが——

唯不幸な人で。と云つて、何も尋常外れて不幸であつた譯ぢやないが、最初一寸

蹉跌したので、それで最う意氣地が無くなつて了つたのです。まだ若い時、私の母が

氣に入つたとか云つて、結婚したのださうですが、母は直に亡くなりました、恰ど私

が生れて六ヶ月目でしたらう。それから父は私を伴れて田舎へ引込むで了つて、全

十二年といふものは何處へも出ずに、私の教育にばかり従事つてゐたさうです、如何か私を一生手元に置く積りしかつたのです。然うして居る所へ、父の兄弟で私の實の小父ですな、それが訪つて來ました。此小父といふのは始終ベテルブルグに住まつてゐて、可なり勢力もあつた人でしたが、是が頻に私を預からうと云つて父に説いたのです、父は如何あつても田舎を離れるのは厭だと云ふものですからね。小父の考では、私のやうな少年が世間見ずに成長しては、利益にならぬ、また父のやうな、陰氣な、沈黙した者の手に育つては、必ず時勢に後れる、それに斯うして置いては、自然風儀も悪くなる道理だといふので、頻に父に説いたのださうです。父も初は容易承知しなかつたが、それでも遂にそれではと云ふ事になる。いざ別際となると、私も泣きましたよ、父の笑面と云つては、曾て見たこともなかつたが、流石に親だから、戀しかつた……ですがね、ベテルブルグへ出ると、直に面白くない陰氣な家の事などは忘れて了ひました。下士學校へ入つて、それを卒業してか

ら、近衛聯隊に附きました。毎年數週間は必と田舎へ歸ることにして居ましたが、歸つてみる毎に、父は益々憂鬱になつて、陰氣になつて、意氣地がないと思ふほど懊惱する。毎日のやうに會堂へ行く、それは可つたが、殆ど口といふものを開かなくなる。或年私が歸つてみると（恰ど二十歳ばかりの時でしたが）、家に瘦せた、黒眼勝な、十歳ばかりの女の子が居ます——これが今考へてみれば、アーシャです。父のいふのには、此娘は孤兒だから、引取つて世話をしてゐる——とかうまア云ふのですよ。私は別段氣にも留めなかつたが、是がまた非常に人見知をして、敏捷かつたが、始終黙つて居る、宛で野獸か何かのやうな娘でね、私が父の氣に入りの座舗へ、これは廣い、薄闇い晝でも、蠟燭が點いてるやうといふ座舗で、母が死ぬまで寢てゐた處ですが、其處へ入ると、其娘は父のに定てあつたヴォオルテール椅子の蔭やら、書棚の蔭やらへ隠れて了つて、如何しても出て來ないです。父は毎月短い手紙を寄しましたが、アーシャの事は稀にしか書いて贈さない——それも何かの筆

叙でなければ、其時分父は最う五十近くであつたでせうが、見た所ではまだく、壯いものでしたですから、私も驚いたね、何にも知らずに平氣で居る所へ、手代から手紙が届いて、開封して見ると、父が危篤だから、早速歸つて呉れる、暇取れば死目に逢へんかも知れん、としてある。取る物も取り敢へず、歸つて見ると、まだ歿しはしなかつたが、最う難しいといふ所で、非常に私の歸つたのを喜んで。瘦せた腕で私を擁へて、何だか斯う吾の腹を探らうとするやうな、何か頼みたさうな、變な眼付をして、私の面を覗込んで、而して私に父の遺言なら、如何な事でも承知するといふ誓言を立てさせて、それから從來側使に使つてゐた老夫にアーシャを伴れて來させたが、アーシャは慄然震へて、殆ど立つて居かねるやうでした。父は辛うじて、

「これは私の娘だ——お前の爲には妹だが、之を筐に残すから、何分頼む。委細は（と側使の老夫の面を視て）このヤーコフが承知してゐる。」

アーシヤは大泣に泣いて、寢臺へ面を埋めてみました……三十分も経つと、父は到頭目を瞑つて了ひました。

後で聞けば、かういふ譯で。アーシヤは舊と母の小間使であつたタチャーナといふ者の腹に出来た兒で。私はこのタチャーナを未だ善く記憶してゐます、すらりとした好い姿で、美しい威のある利口さうな面相で、黒眼勝な大きな眼の女でしたが、傲慢でなかく、負けぬ氣であつたさうです。ヤーコフも遠慮して、判然した事を云はなかつたが、其口裏で察して見ると、母が死でから二三年して、父は此女に關係したらしいのです。其時分タチャーナは最う家を退つて、妹が嫁いて牛飼をしてゐたが、其家に同居してゐました。父は大層タチャーナを愛して、私がベテルブルグへ出た後では、妻に爲ようとまで思たのださうですが、何分タチャーナが承知しない。

ヤーコフが例の通り手を背後へ廻してね、座舖の入口に立つてゐながらの話だが、

タチャーナはなかく、思慮の有る女だから、父の顔に關はるやうな事は爲たくないといふので、父に對つて、私は貴君のやうな方の妻といふ人體か、奥様なぞに爲れると思ふかと云つたさうです。それはヤーコフも聞いてゐたさうです。といふのでタチャーナは家へ入るのを拒むで、相變らずアーシヤと一所に妹の家に厄介になつてゐました。私はタチャーナには少年の時祭日に會堂で逢ふばかりでしたが、何時も熏むだ色の頸巻をして、黄ろいシヨールを扱つてゐましたつけ、而して群聚に交つて窓の邊に立つてゐたから、威のある横面が清いなガラスの地に劃然際立つて見える、其中に古風に低く拜をして恭しく祈禱を始める——まだ善く覚えてゐますよ。私が小父に伴れられて行つた頃は、アーシヤは未だ二歳ばかりであつたですが、九歳の時に母を喪しました。

タチャーナが死ぬと、父は直ぐアーシヤを引取りました。其前からアーシヤを引取りたく思つてゐたのださうですが、タチャーナはそれをも承知しなかつたのです。

「さア今迄旦那々と云つてゐた人の側へ引取られて來たのだから、アーシヤの心も變らずには居ませんわ。生れて始めて絹布を衣て、皆に手に接吻された時の事は今だに未だ覚えてゐると云ひますよ。生母の存生中はなかく、厳しく躰けてゐたさうだが、父の方へ引取つてからは、萬事氣隨にして置く。甘やかすの、猫可愛りに可愛がるのといふ譯ではなかつたが、然し父は深くアーシヤを愛して、何事も爲てはならぬと云つて制した事はなかつたさうです、といふも畢竟アーシヤに對して濟まぬと思ふ氣が十分にあつたからでせうよ。アーシヤは直に自分は此家の主人株で、旦那といふのは矢張自分の父だといふことを合點したが、それと同時にまた自分の身分の變なことをも悟つたから、そこで不負魂が大に跋扈すれば、猜疑の念も増長する、悪い習慣が根を張る、自然の處が減なる、といふ始末で。曾て私に懺悔をしましたが、世界中の人が皆如何かして自分の素生を忘れて呉れ、ば好と思つたこともあるさうです。母が母だから耻かしくは思ふが、そのまた耻かしく思ふのを耻ぢ

て、畢竟母を自慢にするといふ氣にもなる。ですから彼女もなかく、苦勞を爲て來たもので、彼女の年頃では知らんでも可い事を随分知つてゐますよ。けれども然うだからと云つて、彼女の悪いのではありません。氣力は壯で、血氣は拂返へる、ところが傍に氣を注げる者が居ない……萬事氣隨氣儘にしてゐられる！ 然し此又氣隨氣儘といふ奴が極く處し難い奴ですからね。然うぢやありませんか？ 他の令嬢達に負けたくないから、讀書に耽る。といふ有様であつて見れば、如何なるものですか？ 結局變則に始まつた生涯は變則に成立つて了つたが、然し性根まで腐りはしません、分別は矢張儼然としてゐます。

そこで二十歳のお坊さんの私が十三の小娘を擁へて世に立つことゝなつた。父の歿した當座は私の聲を聞いたばかりで、アーシヤは熱にでも罹つたやうになつて、柔しくすれば鬱ぐといふ始末であつたが、それでも段々少しづゝは馴染むで来る。尤も其後私が眞實彼女を妹と思つて愛することが判つてからは、深く私に親むで了

ひました、彼女は何でも善加減に思つて置くことの出来ない性質ですから。

それからアーシヤを伴つてペテルブルグへ出ました。彼女と別々になるのは誠に辛かつたが、如何も一所に居る譯にもいかんから、評判の善い或る學校に入れられた。彼女も別々になるのは已むを得ない譯だと納得はしたやうなもの、其當座は病氣を惹出して、一時は殆ど難かしい程でしたよ。でも其後漸く勘辨が出来て、其學校に四年居ましたが、私の豫期は全然外れて了つた、矢張以前のアーシヤでさ、さしたる變もありませんや。彼女の事では校長も數々私に苦情を云ひましたつけ、「罰しても効がないが、優しくしたつて、そんな手にはお乗なさらん」といふでさ。非常に理解が善くつて、日々の課業も儕輩よりは善く修つたさうですが、如何しても人並にしてゐることを嫌つて、意地を張つてみたり、拗ねてみたりしたさうです……けれども私には彼女を然う責めることは出来ない、彼女の身になつて見れば、人に諂ふか、逆ふかせずには居られなかつたでせうさ。多くの同學生の中で、彼女

の親密にしたのは唯た一人であつたが、それも色々艱難をして來た、哀れな、不器量な娘だつたさうです。他に幾らも同學生の令嬢達はあつても、大抵身分の善い人の娘さんたちだから、皆アーシヤと仲悪で、精一杯毒を言つたり、諷刺つたりしたさうですが、アーシヤは一步も譲らなかつたと云ひます。或時なんぞは、尤も聖書の授業時間だつたさうだが、教師が罪といふ事の話を始めると、アーシヤが何と思つてか、大きな聲で「阿諛と臆病とが罪の中でも一番悪い罪です」と云つたさうです。といふ有様で、畢竟彼女の行狀は改らなかつたが、然し以前よりは品格が善くなりました。尤もこれとても大して善くなつたとも思へないが。

彼此する内に彼女も十七になる。最うさうく學校に置く譯にもいかんぢやありませんか。私も大に困つたね、如何しようかと思つてゐる中に、ふと良策が浮んだ、これは何でも退職にして貰つて、アーシヤを伴つて一二年外國へ出掛ける事だ。それが好と思つたから、思立つた通り爲遂して、今御覽の通り二人でこんな處へ來て

私は晝を修る、彼女は……相變らずお轉婆を爲たり、狂人じみた眞似をしたりしてゐるのです。かうお話をしたからは、貴君も最う彼女のことを然う酷には評して下さらんでせうね。妹は何な事があつても平氣な面をしてゐますが、實はなかく人の所思を憚つてゐるのです、ですものを貴君の所思なら尙更でさ。」

と云つてガギンはまた靜に微笑を漏したから、私はヂツと其手を握りました。ガギンは復た言葉を繼いで、

「まアざつと斯ういふ始末なんですが、彼女にも随分困りますよ。宛で火藥か何ぞのやうな氣性ですからね。まだ誰も好いた者はないが、好いたとなると、大變です。私も彼女には時としては持餘すことがある。此頃も飛でもない事を言出すんですよ。突然にね、私は以前よりも冷淡になつたが、自分は私ばかりの事を思つてゐる、永久私一人を愛する積だ……と云つて、大泣に泣くんでさ……」

「成程それで……」と口まで出かゝつたが、グツと呑込むで了つて、更に出直して、

「では何ですか——最う斯う打開けたお話になつたから伺ふが——實際まだ誰も氣に入つた者はないのですか？ ベテルブルグでは随分若い男を御覽なすつたらうが……」

「そんな人達は些とも氣に入らないのです。そんなのは無益で、アーシヤには豪傑とか、非常な人物とか言はれる者でなければ、山の峽間にでも住むでるやうといふ、繪にあるやうな牧者でもなければ不可のです。然し長談でお引留め申してさぞ御迷惑でしたらう。」

と云つて起上つたから、

「如何です、最う一度貴方の所へ往きませうか？ 何だか宿へは歸りたくなくなつた。」

「では仕事は如何なさる？」

私が何とも返答をしなかつたので、ガギンも毒のない微笑を漏して、それから連

立つて某町へ引返ししました。目馴れた葡萄園や、高臺の白ベンキ塗の家を見た時には、私は味で云つたら先づ甘たるいと云つたやうな心持がしました——宛で蜜でも嘗めさせられたやうな鹽梅で。ガギンの話で胸が透いたやうになりました。

九

アーシヤは戸口の處まで出迎に出て来ました。また笑ふであらうと思の外、その出て来たのを見ると、色が蒼ざめて、默然として下目を遣つてゐます。

「またお出でなすつたよ。此度は御自分から思立つて。」

とガギンが云ふと、アーシヤは不審さうに私の面を見るから、私は手を出して、此度はヂツと其冷切つた指頭を握りました。私は如何にもアーシヤが可傷い、此娘の爲る事には以前は全然了解ぬ處があつたが、今となつて見れば、何の了解ぬことは些ともない、内心に靜定がないのも、端然としてゐることの出来ぬのも、街つて

見せたく思ふのも——其主意は善く解る。私の觀た所では、此娘は人知れず始終胸を惱ましてゐるのである、未だ世の味といふものを知らぬから、動もすれば、修羅を炎して焦心するやうなもの、心は常に眞の道を辿らむとする傾を持つてゐるのである。如何してこんな可異な娘が私の心を動かしたのか、漸く理由が判つた、成程此娘の優姿には稍々野の花を見るやうな美がないではないが、そればかりが私の心を動かしたのではない、私の氣に入つたのは實に此娘の心である。

ガギンは畫稿を覆へして、何か探し始めたから、アーシヤに葡萄園を一所に散歩しようとお勧めると、機嫌よく柔順に承知しました。そこで二人連立つて高臺を下りかけて、其處の大きな平たい石に腰を掛けました。

アーシヤが先づ口を開いて、

「貴君は私共が御一所でなくて、お淋しくは有りませんでしたか？」

「貴嬢は私が參らんで、淋しかつたのですか？」

アーシヤは私の面を流眄で見つて、

「淋しう御座んしたわ」と答へるより早く、「山は好う御座んしたか？」と直ぐ言葉
を繼いで、「高くつて？ 雲よりも高くつて？ 山は如何なだつたか、話して聞かし
て頂戴な、貴君は兄にはお話を爲すつたでせうが、私は未だ些とも伺はなかつたか
ら。」

「でも貴嬢は他處へ往つてお了ひなすつたのだから、仕方がない。」

「他處へ往つたのは……アノ……何だつたものですか……其代り今度は最う何處
へも往きませんよ」と裏のない所を愛想よく云つて、「貴君は今日は憤つて居らしつ
た。」

「私が？」

「はア。」

「飛でもない。何で貴嬢……」

「それは如何だつたか、善くは知りませんがね、何だか憤つて居らしつたやうで、
お歸なざる時も、佛然して居らしつたわ、あんな風をしてお歸なすつたから、私は
何だか厭でならなかつたけれど、歸つて居らしつたから、嬉しいわ。」

「眞個に歸つて来て好かつた。」

少年が心地の快い時に屢く爲る事だが、アーシヤは一寸肩を揺つて、

「私は人の心を察しることが上手よ。子供の時にも、父が隣座敷で咳拂をする時、
それを聞いたばかりで、私に對して不満か、然うでないか、直に辨りましたよ。」

今日までアーシヤは曾て父の事を言出したことが無かつたから、此言葉を聞くと、
私は珍らしく思つて、

「貴嬢は御父様が好きでしたか？」

と何心なく云つて、ふと赤面したが、赤面したと思ふと、非常に残念であつた。
アーシヤも何とも返答はせずに、同じやうに赤面した。二人とも黙つて了つて、

遙か前方のラインに汽船が烟を吐いて行くのを眺めてみると、聽てアーシヤが低聲で、

「何故お話をさらんの？」

「貴嬢は何故今日私の面を見てお笑ひなすつた？」

「何故だか、自分にも分りませんわ。どうかすると、泣きたくなつて、それでゐて笑ふことがあるんですものを。ですから貴君もその積りでゐて頂戴よ、直の爲る事と心持とは大變違ふことがありますから。ア、それは然うと、ロレレヤの噺ね。あれは面白い噺ですね。彼處に見えるのがアノ岩なんでせう？ 初は衆人を溺らしてゐたのが、人を愛したもんだから、此度は自分で身を投げるやうに爲つたんですとね。私はあの噺が大好。フラウ、ルイゼは色々な噺をして聞かせますよ。彼處の家には眼の黄ろい烏猫が居て……」

面を舉げて、捲髪をばらつと振亂して、

「嗚呼快い心地だこと！」

此時單調の聲が斷續して聞える。大勢の聲で、拍子を整へて讚美歌を唱つて行く、神詣の人が大勢揃つて、十字架や聖像を捧げて、下の往來を練つて行くのである。

アーシヤは漸々に遠かつて行く人聲に耳を傾けてゐたが、

「あの中に交つて行つたら、好からうねえ！」

「貴嬢はそんなに信心家ですか？」

「何處へでも可いから遠方へ、お詣にでも何でも人の出來ないといふ事を爲に往つたら、好いでせうと思つて。でない、段々年ばかり加つて、何も出來ずに了ひますものを。」

「貴嬢はなかく功名心が熾だ。空しく一生を送りたくない、死後に名を留めたいといふのですね？……」

「だつて出來ない事ですか？」

「出来ない事です」と云はうとしたが……アーシヤの明々した眼付を見ると、忽ち気が變つて、

「まア試つて御覽なさい。」

アーシヤは暫らく黙然としてゐるが、其時疾うから蒼ざめてゐた其面に何か瞥と見えたかと思ふと、直ぐ消えて了つたものがある。暫らくして、

「アノー貴君は大變好いて居らしたの、彼方を……覚えて居らしたつて？ そら貴君とお相識になつた二日目に城趾で兄が健康を祝するんだつて、麥酒を飲みましたらうね……、彼方……」

私は笑出した。

「あれは令兄が戯言を言つたんですよ。私は誰も好いた者はない、少くも今の所では先づない。」

「女の如何いふ處が好くつて？」

と一寸首を傾けて邪氣ない面をする。

「妙な事をお聞きなさるね！」

と云ふと、アーシヤは少し狼狽して、

「ア、こんな事を伺ふもんぢやなかつたつけ。ね、然うでせう？ 失禮でした、私は何でも思つた事を直ぐ口へ出して言つて了ふのが癖。だから物を言ふのが心配ですわ。」

「いや、心配なんぞ爲さらんが可い。何卒關はすお話しなさい。私は貴嬢が漸く遠慮が無くなつたので、非常に喜んでゐる。」

アーシヤは少し羞らつた體で、溫雅に軽く笑つた。私はアーシヤの斯ういふ笑方をするのを始めて聞きました。

「では貴君が何かお話をなさいよ。」

と云ひながら、アーシヤは衣服の裾を撫で、足の上へ引張り上げて、永く腰を

掛けてゐるさうな風をして。

「お話をなさるか、でなければ何か讀むで下さいな、そら此間オネーギンを讀むで下すつたでせう——ね、あゝいふ様に……」

ふと何か考へて、

幸なかりける垂乳母の、

墳塋の上に建てたりし、

十字のしるし今ははた、

如何なりけむ影もなく。

と中音に誦する。

「違つた！ ブーシキンのは然うぢやない。」

「私はタチャーナに成りたいわ」と矢張考へながら、言葉を繼いだが、ふと又氣を變へて、「何かお話しして頂戴よ。」

然し私はなかくお話しどころでは無かつた。アーシヤを見れば、満身に華やかな日光を受けて、沈着いて、温雅としてゐる。四邊は天も地も一體に燦爛と光り耀いて、空氣までが鮮に見える。

「あゝ佳い景色だ！」

と我知らず低聲で云ふと、アーシヤも私の面は見ずして、同じやうに靜に、

「眞個に佳い景色ですなあ！ 私達も若し鳥だつたら、舞上つたり、飛で行つたり

……あんなに蒼空に消えて了つたりしられて快いでせうなあ……鳥でないから、不可けれども……」

「人にだつて羽が生えることが有りますさ。」

「まア如何して？」

「年齢を加つて御覽、自然と悟る。感情には人を天へ昇らせるのが有るから。貴嬢にも必然生えるでせう、心配なさらんでも。」

(72)

「貴君には生えたことが有りますか？」

「然うですねえ……未だ私は飛だことは無いやうだ。」

と云つてもアーシヤは眞面目なもので、復た考へ出す。私は少し屈むで、アーシヤに寄添ふようにしてゐた。

「貴君はワリスを謂ふが踊れますか？」

と突然問はれて、少し方角が附かなくなつたが、

「踊れますとも。」

「ぢや歸りませう、直ぐ……而して兄にワリスを奏いて貰つて、私達は……アノ……羽が生えた積で、踊りませう。ね？」

アーシヤが住宅の方へ駈けて行くから、私も續いて駈出して、聽てランネルの妙音に連れて、二人して狭い座敷を狂ひ廻つた。アーシヤは興に乗つて、なかく巧に踊りました。一體アーシヤの面相は娘々してはゐるても何處か威があつたが、この

時ばかりは急に柔しく女らしくなりました。私はその後何時までもアーシヤの纖やかな身體に觸つてゐるやうな、急しくなつた息氣遣がつい傍で爲るやうな、蒼ざめては居たけれど、活々した面を捲髪で勢よく拂つて、黒眼勝の眼を殆ど閉むるばかりに細めて据ゑてゐるのが、眼前に隠現くやうな氣がして耐らなかつた。

十

(73)

此日は三人小兒のようになつて、終日遊びましたが、いや面白い事でした。アーシヤは大層愛くるしくなつて、少しも氣取らなかつたので、ガギンも其舉止を見て悦んでゐたやうです。私は夜更けてから歸りました。ラインの河心まで来た時、船頭に船を下流へ流せと命じたので、老夫がぐいと權を引揚げると——人も舟も大河の水に奪られて行く。私は四方を願望したり、物音に聽入つたり、昔を憶出したりしてゐたが、その中にふと心の底の方で何を悶えるともなく悶え出す。空を仰いで

見れば、空も落着かぬ氣色で、一面に星が翻れて、うよくぞよくと、慄へるやうに光つてゐる。河を覗いて見れば、此處も同じ事で、薄闇い、冷々とした深處に、星影が揺めきつ戦きつしてゐる。何方を向いても、ごたくとして賑かなので、心は益々落着かない。舷に肱を持せてゐると、風の耳元に騒ぐ聲や、浪の幽に體を洗ふ音が神経を弄るやうで、涼しい水氣が立つてゐても、なかく頭は冷えない、岸で鶯が啼いてゐるが、そのしほらしい聲までが人の心を誘ふやうである。私は覺えず涙ぐむだが、それも何に感動するともなく感動して涙ぐむのではない。それかと云つて、心が大きくなつて、奮ひ出して、萬物の情が總て了解めて、世の中の物が皆愛しらしく思はれる時、如何と押へて云ひやうもないが、何も彼も一時に如何かしたいやうな心地になるもので、既に此頃も然うしたことがあつたが、私の感じた所はそれでもない。そんな事ではないが、唯幸福を得たいといふ欲がむらくと起つたのである。其時は未だ此欲の眞の名を言ひ得なかつた——唯幸福を得たい、幸

福に飽きたいで、悶々としたのである……

舟はどんどど流れる、船頭を見れば、權に凭れて假寝をしてゐます。

十一

翌日もガギンを訪ねるとて宿を出ましたか、私はアーシヤを好いたのか、好かないのか、そんな事は少しも考へずに、唯アーシヤの事を色々考へて、其身の上を哀れに思つたり思懸なく隔心がなくなつたのを喜んでゐました。アーシヤの氣心は昨日始て知れました。それまではアーシヤは彼方向いてゐたやうなものです。さてかう本體を拜むで見ると、その面影までが恐ろしく美しくなつて、如何にも珍らしく見えるのみならず、眉宇の間に何やら人の魂を奪ふものがほのめくやうにも思はれる……

前方に白々と見える例の家を絶えず眺めながら、私は馴れた徑をいそぐと歩い

て行きました。遠い未來の事などは勿論、明日の事をも思はなかつた。唯洵に愉快であつた。

ずつと例の座敷へ通ると、アーシヤは面を赧めたが、見ればまた靚粧してゐる。けれども、服装には副はぬ面色で、惘然としてゐます。私の浮々として來たのとは大分の差だ。私の面を視るとその儘、例の通り駈出しさうにしたが、それでもちつと耐へて、座敷に留まつてゐました。美術家といふものは、所謂自然の尻尾を捉へたと思ふと、病の發作したやうに俄に技癢を感じて、妙に氣が荒くなるものであるが、ガギンも恰どさうした心地になつてゐる時と見えて、頭髮を散らして、滿身顔料に塗れて、框張の布に對つて突立つてゐるが、腕一杯に刷毛を揮廻しながら私には怕ろしい面をして顯でしやくつて見せたばかりで、直ぐ一足後へ却退つて、眼を細くして見て、また繪に取掛るといふ爲體である。それを妨げるも心ないと思つから、私がアーシヤの傍に腰を掛けると、黒眼勝の眼が徐に此方に向きました。

ちと機嫌を直させようと思つて色々骨を折つて見たが、その効がなかつたので、遂に「貴嬢は昨日と今日とは全で様子が違ふ」と云ふと、アーシヤは沈着いた、籠つた調子で、

「然うでせう。でも何でも有りません。唯昨夜熱く眠なかつたもんですから——終夜考へてゐて。」

「何をそんなに？」

「色々な事を考へましたの。小兒の時から習慣ですわ、まだ母と……」

母といふ時は、餘程骨の折れた様子であつたが、更に出直して、

「母と一所に居る頃から然うでしたわ……昨夜もね、いろんな事を考へましたの……」

あの何でせう、誰でも自分で自分が如何なるのだから判らないことが有るでせう、時とすると斯うなると不可と思つてゐても、如何も然うなつて了つて、仕様がなことが有るでせう、それから何時でも有の儘を云ふといふ事も出来ないもんでせう

「何故だらうと思つて……それに考へて見れば、私は……あの……何も知らないから、些と稽古を爲なければ不可と思つて。どうも私の教育は不十分だから、教育を仕直さなければ可けませんわ。ピアノも弾けないし、畫も作けないし、裁縫さへ拙くつて、何にかけても才がないから、私と一所に居たら、さぞ面白くなからうと思つて。」

「貴嬢は自分を視ることが太り酷だ。書物も随分讀むでお出でなさるし、教育もお有なさるし、また貴嬢ほど才が働けば……」

「私は才女？」とアーシヤが如何にも邪氣ない面をして問ふので、私は覺えず笑出したが、アーシヤは莞爾ともしないで、「阿兄、私は才女？」と兄にも問ねた。

兄は何とも返答をせず、絶えず刷毛を取替へたり、高く手を挙げたりして、仕事を廢めない。

アーシヤは尙ほ物思し氣な様子で、

「私は自分でも何を思つてゐるのか、夢中の時がありますよ。だから自分でも時々眞個に心配になりますよ。あ、如何かして私は……眞實でせうか、女といふものは餘り書を読むでは不可といふのは？」

「餘計讀まんでも可いでせうが……」

「どんな書を読んだら可いでせう？ 一體まア如何したら可いんでせう？ 私は貴君の善いと仰しやる事なら、何でも必と爲ますから。」

と邪氣なく人を依頼つて、面を覗込む。私は返答に當惑した。

「貴君は私のお相手でお退窟ではなくつて？」

「何のそんな事が……」

と未だ云ひきらぬ内に、

「そんなら善かつた！ 私はまた御退窟ぢやないかと思つて。」
とアーシヤが小さな暖つた手で私の手を握る途端に、

「某さん！」とガギンが大聲に呼んだ。「此地は少し黒過ぎはしなかつたでせうか」
私はガギンの側へ行く——アーシヤは座敷を出て行きました。

十二

一時間ばかりすると、アーシヤは又座敷の入口まで来て、手招をして私を呼出して、

「あの變な事を伺ふやうですが、若し私が死したら、貴君は慇然だと思召して？」
「今日はまア如何したと云ふんです！」

「でも直に何だか死にさうな氣がしますものを、時々かう何を見ても最う是が見納のやうな氣がして耐らないことが有りますの。ですが寧ろ死んで了つた方が優うござんすわ、かうして生きてゐるよりか……そんなに人の面を御覽なすつては厭ですよ。何も私は偽言を吐きはしませんよ。そんなに爲さると、また貴君を畏がりますよ。」

「よ。」

「では貴嬢は私を畏く思つた事があるのですか？」

「餘程變に見えるでせうが、如何も私にも仕様がなないんですものを。私は最う笑ふことも出来ないわ……」

アーシヤは日が暮れても、尙ほ鬱々として屈託さうな面をしてゐました。私には善くは判らなかつたが、何處か様子の變つた所がある。動もすれば私の面を視るが、その可異な眼付で視られる毎に、私は胸が冷りとする。見た所ではアーシヤは沈着いてゐるやうだが、如何も沈着いてゐるとは思はれません。けれども蒼ざめた面色や、力の抜けた氣の無い舉動に、何とも云へぬ優美の處があるので、私はそれを眺めて樂むでゐましたが、アーシヤは何故か私を不機嫌だと思つてゐました。

歸らうとする少し前、アーシヤが、

「某さん。私には何だか貴君が私のことを輕躁な女だと思つて居らつしやるやうで

厭でならないんですが……あの貴君、何卒是から私の言ふことを信じて下さいな、
而して隔てなく交際して下さいな、私は貴君に對して取繕つた事などは最う決して
云ひませんから、若し云つたら、如何爲すつても可いから……」

この「如何爲すつても可いから」がまだ私を笑はせた。

「あら笑事ぢやありませんよ」と鋭く云ふ、「そんなにお笑ひなさると、貴君が昨日
仰しやつた通りの事を私も云ひますよ、何故お笑ひなさるつて」。少時して「昨日貴
君は人間にも羽が生えたと仰しやつたでせう？……ね、覚えて居らつしやるでせ
う？……私にもあの羽が生えましたの。けれども飛んで行き所がなくつて……」

「何故ね？ 貴嬢は何を爲さらうと自由ぢやありませんか？」

アーシヤは憚る所なく熟と私の眼を諦視てるたが、聽て眉を擧めて、

「貴君は今日は私を輕蔑して居らつしやる。」

「輕蔑して？ 貴嬢を？」

「大分陰氣だね」とガキンが私の言葉を奪つた、「如何です、また昨日の如くにワリ
スでも奏りませうか？」

「いや、いや、厭な事だ！」とアーシヤは我と我手をぐつと握緊める。

「無理にとは云はんよ……そんなに厭なら……」

「厭な事だ」と蒼ざめて又云ふ。

ラインへ来て見れば、薄闇くて水勢は箭よりも急である。私は心の中で、「予の事
を何とか思つてゐるのぢやないか？」

翌日眼が覺めるや否や、また「おれの事を何とか思つてゐるのぢやないか？」自
分はアーシヤの事を如何思つてゐたのか、それは一向知りたくなかつたが、たゞこ

の無理笑をする娘の面影が深く心に浸みて、一寸はなかく消えさうも無いと云ふことだけには心付いてゐました。此日もガキンの宿で一日遊び暮したが、アーシヤには一寸會つたばかりで。頭痛がして、気分が悪いとか云つて、頭を縛けて、面も寝れて蒼ざめてゐるが、重さうな臉をして、二階を降りて來て、力なく微笑して、

「なアに何でもありません、直に癒るでせう」と云つて——その儘出て行つて了ひました。私は淋しいやうな、悲しいやうな、つまらないやうな、妙な心地になつたが、その癖いつまでも歸りたくなくて、晩くまで談話をしてゐました。けれども最もアーシヤには會へませんでした。

翌朝になつても、如何やら夢現の境を迷つてゐるやうで、仕事に著手らうとして見ても、手に附かず、何を爲すまい、考へまいと思つても、それもならず、詮方なしに町を彷徨いて、宿へ歸つて、また宿を出ました。すると背後から少年の聲で、

「もしく、某さんつていふな旦那ぢやございませんか？」

振返つて見ると、小僧が立つてゐる。

「アンネツトさんから」と手紙を出す。

開いて見ると、成程アーシヤの手で、尤もしどろな走書で、

「是非々々御目もじの上お話し申上度事候まよ今日四時に城趾道の禮拜堂まで御越し下され候やうねがひ上り、私事今日とんだ疎忽をいたし候何も御目もじの上くはしくお咄し申上べく候若しお差支へなくば御承知のよし使の者に御申聞け下さるべく候」

としてある。

「御返事は？」と小僧が問ねるから、

「承知しましたと云つて呉れ」と云ふと、

小僧は駈出して行きました。

十四

宿に歸つて、どつかと坐つて、思案にくれた。心は甚だしく騒ぐ。アーシヤの手紙を取出して、繰返へしく幾回となく讀むでみた。時計を見れば、未だ十二時にもならん。

ふと戸が開いて——ガキンが入つて來ました。

その面を見れば、雲が懸つてゐる。私の手を把つてぢつと握つたが、何か心配さうに見えます。

「如何したんです？」

と問ねると、椅子を取つて私の側に座を構へて、さも餘儀なさうに微笑しながら、吃りく云ふことには、

「一昨日でしたか、長談をして貴君を驚かしたが、今日もまた一ツ驚かすことがあ

ります。これが他の人ならば、私もかう直接に……何はしませんが、貴君は立派な方ではあるし、それに私には親友だ——ね、然うぢやありませんか？——だからお話をするが、何ですよ……妹が……その……貴君に眷戀してゐますよ。」

と聞くと等しく私は慄然として起上りかけて、

「えッ、何と仰しやる？ 令妹が……」

「然うですく。彼は實に狂人ですよ、お蔭で私まで狂人になりさうだ。唯幸な事には、彼女には偽言を云ふことが出來るので、何も彼も私に打開けて話してしましました。でも潔白なものですよ！ だが彼女は一身を誤る、必ず誤る。」

「そんな事はない……」

「いや、ない事はないです。かういふ譯で、昨日一日何も喰へずに寝てゐましたが、何處が悪いとも云はない……尤もいつも然うですが。晩になると、熱が出たが、私はさして心配もしなかつた。すると今朝二時頃でしたらう、宿の主婦さんが私を起

して、令妹さんが加減が悪いやうだから、往つて見て呉れといふのです。驚いて往つて見ると、彼女は衣服をも着更へずに寝てゐましたが、非常な熱で泣いてゐるのです、頭は炎えるやうで齒の根も合はぬやうだから、「如何したんだ？病氣なのか？」といふと、突然私の首に抱付いて、若し私を殺ろしたくなくば、一刻も早く携れて立つて呉れといふのです……私には何だか更に事由が解らんけれども、仕様がなから、色々慰めてゐましたが……益々泣立てる……その内に、その泣く聲の下から、ふと……まア、早く云へば、貴君を愛してゐると云ふのです。これはお互に分別といふものが有る者には想像も出来ん事だが、彼女は一體深く物に感ずる、そのまた感じた所が非常な勢で以て外に發する、それがいつも突然に起つて来て、而して既に起るとなると、最う到底も抑へきれないといふのだから、何の事はない、雷雨のやうなものですな。」

ガギンは尙ほ談話を續けて、「それは貴君は甚だ何だ……人好のする方だ。けれど

も如何して彼女が貴君の事を然う深く思込んだのか——實は私には解らん。自分では最初から貴君に何したのだと云つてゐる。それで此間も私の外誰をも愛したくないと云つた時には、悲しくなつて泣いたのださうですよ。所が彼女は貴君に輕蔑されてゐる、どうも貴君は彼女の素生を御存じだと思つてゐるのです、私に饒舌たらうと云ふから、勿論饒舌ないとは云つて置いたが、彼女の迂散臭い處を嗅出す力はそれは非常なものですからな。それで唯妄に立ちたがる、直ぐにも立ちたいと云ふ。そんな事で拂曉まで掛つてゐましたが、到頭私に明日此地を去るといふ誓言を立てさせて——而して漸う眠入りました。それから私も色々考へて、結局貴君とお話して見ようと決心したのは——成程私にしても妹の云ふ事は尤だと思ふ。此地を去るのが一番上策だ。だから私も今日既に妹を携れて立たうかと思つたのです。少し思ふ事があつて、見合せました。といふものは、事に寄ると……それは何とも云へん——貴君にも、妹がお氣に入つてゐるかも知れん。若し然うなら、何も

周章て、立つ必要はない。とかう思つたから、極の悪いのも何も忘れて……それに私もお思當る事がないでもないから……貴君のお心を何つてみることに決心したのですが……何でせうか……」とガギンは、氣の毒な、いひ出しかねて逡巡してゐたが、聽て「若しお氣に障つたら、御勘辨を願ふが」と云繼いで「如何も私はかういふ事には經驗がないので……」

私はガギンの手を把つて、斷然と、

「では何ですな、貴君は私が令妹を好いてゐるか、否だか、それを確かめたいと仰しやるのですな？ よろしい、私は好いてゐる……」

ガギンは私の面をぢろりと見て、吃りながら、

「ですがね、貴君は結婚して遣つては下さるまい？」

「然う仰しやつては、私も返答に困る。まあ考へてみても下さい、今私が……」

「成程々々」とガギンは私の言葉を奪つて、「勿論私は貴君に迫つて返答を聞く譯に

はいかん、それに一體こんな事を伺へた筈のものではないのでせう。ですが如何したら可いでせう？ 火悪戯は出来ない。貴君は未だアーシヤを善く御存じないので、彼女がかうなつて見ると、病氣を惹出すか、逃げるか、貴君に喚出を掛けるか、何を爲るか知れません。他の者なら随分自分の心一ツに納めて置いて、時節を待つといふことも出来るでせうが、彼女にはそんな事は出来ません、彼女はかういふ事は今回が始めて、すすからな——だから私も困るのですよ！ 今朝も私の足下に膝を突いて、泣いたの泣かんと云つて、それは非常でした、若しあれを貴君が御覽であつたら私がかう心配するのも道理だと思つて下さるだらうと思ふ。」

私は思案にくれた。「貴君に喚出を掛けるかも知れん」と云つたガギンの言葉は胸にひしと徹へた。かう敵手が正直に打掛けて話をするものを、此方ばかり隠蔽をするのは如何にも愧づべき事のやうに思はれたから、遂に、

「貴君の仰しやる通りだ。一時間ほど前に令妹から手紙が届きました。これです。」

ガギンは手紙を取つて走讀に讀むで、さて力なく手を膝に落した。その驚いた面色は可笑い程であつたが、然し其時はなかく笑どころでは有りません。

ガギンは更に、

「貴君は、頰いやうだが、立派な力だ。が、まア如何したら可いでせう？ それも然うだが、一體如何いふ了簡なのだらう？ 自分から立ちたいと云つて置きながら、今さら貴君の所へ手紙を寄して、疎忽をしたと云つて後悔する……而して又何時此手紙を書いたのだらう？ 貴君に會つて如何する積なのだらう？」

と氣ほひ立つのを慰めて、さて出来るだけ氣を落着けて、これから如何しようといふ相談を始めた。

結局かういふ事に相談を決めました、穩に事を納めようとするれば、私がアーシヤに會つて、胸を割つて談話をした方がよろしいから、然うすると、そこでガギンは宿に残つてゐて、手紙の事などは一向知らん爲をしてゐる、而して晩に復た會はう

と約束しました。

「私は深く貴君を屬望にします」とガギンは私の手を握つて、「何卒私共兄弟を助けて下さい。が、どうしても明日は立ちませうよ」と起上つて「貴君は到底結婚して遣つては下さるまいから。」

「まあ晩まで待つて下さい。」

「それなら然うとしても宜しいが、貴君は到底結婚はなさらんよ。」

ガギンが歸つてから、私は長椅子に倒れて眼を閉つた、餘り色々な事を一時に感じたので、目が眩ふやうである。ガギンの隔てのないのも恨めしいが、アーシヤも恨めしい、アーシヤが慕つて呉れるのは嬉しくもあるが、また迷惑でもある、何故兄に打開けて云つて了つたのか、更に其意が了解めん。兎に角急も急、殆ど瞬く間に運命を決めなければならぬので、居ても起つてもゐられんやうな氣がする……

「十七許りの、而もあんな小娘と結婚する——馬鹿な、そんな事が出来るもんか！」

と起直りさまに一喝した。

十五

約束の時間にラインを渡ると、對岸で今朝の小僧に出會つた。私を待つてゐたものと見える。

「アンネットさんから」と小聲に云つて、また手紙を出す。

これは出逢の場所を變へた報知で、禮拜堂は廢めたから、是から一時間半経つて、フラウ、ルイゼの家に来て、樓下の戸を敲いて、三階へ上れといふことである。

「今度も承知したつていふんですか？」と小僧が問くから、

「然うだ」と云棄て、岸傳に歩き出した、宿へ歸る間もないし、と云つて町を彷徨くのも氣が向かなかつたからで、廓を出ると、其處に小さな園があつたが、園内には投球戲の店があつて、麥酒も賣つてゐる。私は其店へ入りました、年老つた獨

逸人が最う幾人か投球戲を爲てゐる光景で、木の球が轉がる音がして、をりく喝采が起る。眼を泣腫した小綺麗な婢が麥酒を持つて來たから、私が其面を覗くと、婢は周章で面を反けて彼方へ往つて了ひました。

傍に居た、肥つた、頬の赤い男が「ハンヘンは今日は大分御愁傷の體だな。然しそれもその筈か、許嫁の御亭が兵隊に取られたんだからなあ」と云ふ。婢を見れば隅の方に小さくなつて、手を頬に加てゐるが、泪は指の股に傳はつて滴々流れてゐる。誰やらが麥酒を命ずると、婢は其を持つて往つたが、又舊の所へ戻つて來た。その悲しさうな様子に誘出されて、私も亦是から往かうといふ出逢の事を考へ出したが、いや、考へる事が皆心配な、陰氣な事ばかりだ。如何して平氣で此出逢に往かれたものでない。これが往つて、思合つた中の睦じい談話でもすることなら格別であるが、約束どほり辛い役目を仕課さなければならぬのである。「彼女とは串戲は出來ない」と云つたガギンの言葉は肝に銘じた。一昨々日は小舟に乗つて浪に漂ひ

片戀

ながら、幸福を待焦れて懊惱した癖に、今その幸福が望み通り降りかゝつて来れば——逡巡をして、遂に逃げる、いや、逃げなければならぬ仕誼となる……餘り唐突なので、途方に暮れる。本尊のアーシャも懐かしいことは懐かしいが、あの通りの變物であるから、その情熱の熾なことや、その経歴や教育の事を思へば——内々薄氣味わるくも思はれる。感念と感念とが心中で戦つてゐる中に聽て約束の時刻が近づく。私も遂に決心した、「到底も結婚することは出来ん、予が好いてゐたことには氣が附くまいから、恰ど好い。」

起上つて、哀れなハンヘンにはターレルを握らせて（其辭禮も言はなかつたが）、フラウ、ルイゼの家へ往きました。最う日はとつぷり暮れて、薄闇い町家の上に空が僅ばかり夕榮で赤々と見える。ことごとくと戸を敲くと、戸は直ぐ開いたから、闕を跨いで、内へ入ると、眞の闇だ。

「此方へ！ お待ちかねですよ」と、皺喰れた聲がする。

十六

手探で二足ばかり進むと、誰やらの骨ばつた手が私の手を把る。
 「貴女はフラウ、ルイゼですか？」
 と尋ねると、そのしわかれた聲が、
 「はあ、然うですよ。お楽しみさま、へ、へ、へ。」
 老婆に伴れられて、急な梯子段を登つて、三階へ出た。小窓の明で薄闇いけれど、老婆の皺だらけな面は見たが、齒が抜けて陥落んだやうな口元に、味な厭らしい微笑を湛へて、臙臙した眼をすほめてゐる。小さな戸を指して此處だと知らせるから、慄へながらその戸を開けて、入るより早く後を閉切つて了つた。

片戀

入つた室は狭い間で、大分薄闇かつたから、アーシャが何處に居るか、急には分らなかつたが、熟々視れば、長いシヨールに纏まつて、窓の側の椅子に腰を掛けて

面を反けてゐる、物に怖ぢた小禽のやうに、殆ど隠して居るのかと思はれる程に首を蹙めて、息氣を激まして、慄へてゐるそのいぢらしさは、なかく口では云はれません。私が側へ往つたら、益々面を反けて了つた……

「アンナ、ニコラーエヅナ かく云へば我國にてお美代さんと云ひたるが如く、アーシヤト後にも要あれば此に記しておく。」

と云ふと、アーシヤは居直つて、私の面を見上げようとしたが——見上げられぬ。其手を把つて見たら、冷切つてゐて、死人の手のやうであつた。

「あの私は……」とアーシヤはいひかけて嫣然しようとしてみたが、蒼ざめた唇が命令を聽かない。「私は……どうも言はれない」と云つて黙つて了つた。一言云つては息氣を切らしてゐて見れば、それも道理で。

私はアーシヤの側に坐つて、

「アンナ、ニコラーエヅナ。」

と繰返して云ひは云つたが、同じく二の句が續がない。

二人とも黙つて了つた。私はアーシヤの手を把つたまゝで、その面を視てゐるが、アーシヤは尙ほ身を縮めて、苦し氣に呼吸をして、込上げて來る泪を飲込むで、泣くまいとして密に下唇を咬緊めてゐる……その小さく固くなつたところは如何にも哀れで、心細さうである、大方疲れ果て、漸う此椅子まで辿着いて、その儘それへ倒れかゝつたものでせう。私は心が蕩然となつた……

「アーシヤ。」

と幽にいふと、アーシヤは徐に私の面を視あげた……あゝ戀する女の眼付といふものは——到底も形容の出來るものではない！ 祈るやうな、依頼るやうな、何や彼や聞きたさうな眼付で、身をも心をも投出してゐるやうである……私は其眼に引寄せられて、それに逆らふことは如何しても出來なかつた。微妙の情火が全身に行巨る、血は沸返へる。我を忘れて打俯しになつて、アーシヤの腕に接吻すると……

戦くやうな、斷續の太息が聞こえて、力の抜けた、震へる手先が頭髮に觸ると感
じたから、ふつと面を擧げて見ると、アーシヤの面は僅の間に宛て生變つたやうに
變つてゐる。恐怖の色は消失せて了つて、眼ざしは恍惚としてゐて、それを見てゐ
る此方の心迄が引入られさうになる、口を少し開いてゐるが、額は大理石のやうに
蒼ざめて、捲髪は風に吹薙いだやうに後へ垂れてゐる。私は何も彼も忘れて了つて、
握つてゐた手を引寄せると、手は素直に引寄せられる、それに隨つて身體も寄添ふ、
シヨールは肩を滑落ちて、首はそつと私の胸元へ、炎えるばかりに熱くなつた唇の
先へ来る……

「死んでも可いわ……」とアーシヤは云つたが、聞取れるか聞取れぬ程の小聲であ
つた。

私はあはやアーシヤを抱うとしたが……ふとガギンの事を憶出すと、心がざらりと
と滲はる。「何を爲るツ！」と一喝して、慄上つて後へ居去つて……「令兄は……令

兄は何も彼も知つてゐますよ……かうして貴嬢に逢ふことも知つてゐますよ。」

アーシヤは落膽して椅子に直つた。

「知つてお出でなさる」と云ひざまに私は起上つて室の隅へ往つて、「令兄は何も彼
も御存じた……私は皆話して了はなければならなかつた。」

「話して了はなければ？」とアーシヤも微に云つたが、未だ茫然としてゐて、私が
何を言つたのか善くは解らんやうである。

「然です、話して了はなければならなかつたのです」と私は少し焦れ氣味になつた、
「それといふも貴嬢が宜しくないからだ——貴嬢がさ。何故令兄に打開けて話して
了つたのです？ 今日令兄が私の所へ事て、貴嬢が是々云つたと云つてお話しなす
つた」私は成るだけアーシヤの面を見ぬようにして室内を歩いてゐました。最うい
けない、駄目だ。」

アーシヤは椅子を離れようとする……

「お待ちなさい」と私は大聲に云つた。「まあ待つて下さい。私も男だ！ お話することだけはお話しして置かなければならぬが、然し何で貴嬢はさう狼狽したんです？ それも私の心が外れ出したとでもいふのなら、何だけれど、少しもそんな事は無いぢやありませんか？ それを貴嬢が打開けて了つたもんだから、今日令兄が入らした時、私も隠し切れなかつたのです。」

「ちよッ、何を云つてゐるんだ！」と心中では自分で自分を吐り飛ばした。予は徳義も何も知らぬ虚言家だ、ガギンはかうしてアーシヤに逢ふのを知つてゐるのだ、最う何も彼も爲損じた、露顯して了つた——と頭の内鳴り喚く。

「私が兄を喚んだのでは有りませんわ。兄が自分の方から來たのですわ」とアーシヤがおろ／＼聲で云ふのが聞える。

「兎に角貴嬢は取返へしのならん事を爲て了つたのだ。而して今さら立たうと云つて……」

「でも立たなければなりませんものを。今日此家へお出を願つたのも、お暇乞が爲たいばかりで」と矢張小聲で云ふ。

「私は貴嬢と分れるのが如何なに辛いか知れん。それを貴嬢は察してゐないのですか？」

「ですが何故兄にお話を爲すつたの？」とまだ不審がつてゐる。

「だつて話さん譯にいかんぢや有りませんか？ それも若し貴嬢が打開けて了はなかつたならば……」

「私は室に籠つてゐたんですけれど……主婦さんの所に合鍵が有らうとは、些とも知らなかつたんですものを……」と罪のない事を云つてゐる。

かうした場合に當人の口から、こんな邪氣ない分疏を聞いた時には、私は殆ど立腹しようとした……けれども今となつて其言葉を憶出して見ると、泪が漏れる。アーシヤは實に哀れな正直な小兒でした！

「兎に角最ういかん！ 最う駄目だ！ 最うお分れ申す外仕方がない」と又愚痴を漏して、密にアーシヤの様子を覗つて見ると……俄にアーシヤは面を赧らめた。羞かしくもなれば、怖ろしくもなつたのであらうと、その時その面を見て私は然う思ひました。私とても熱にでも浮かされたやうな鹽梅で、歩いては饞舌つてゐました。「折角情合に膩が生つて事たものを、貴嬢は押殺して了つたのだ、お分れ申さなければならんやうになつたのも、貴嬢のお蔭だ。貴嬢は私を信じなかつたから不可、疑つたから不可……」

と饞舌つてゐる中に、アーシヤは次第々々に俯きだしたが、突然跪いて、兩手を面に加て、泣き出した。と見るより私は駈寄つて、抱起さうとしたが、なかく温順に抱起されてはゐない。私はこの女の泣くのを見ると、耐らなくなる、泣かれると、直ぐ動願して了ふ。

「アンナ、ニコラーエヅナ！ アーシヤ！ 何卒、お願だ、泣くだけは休して下

さい……」といひながら、手を把つて引起さうとすると……

や、驚くまい事か、アーシヤは突然躍上つて、電光の閃く如くに戸口へ駈寄るかと思ふと、最う姿は見えなくなつた……

幾分かを経つて、フラウ、ルイゼが室内へ入つて來た時には、私は未だ室の中央に突立つた儘で、宛然雷にでも撃たれたやうな面をしてゐた。どうも腑に落ちん、どうして此出逢がやう唐突に馬鹿々々しく終むで了つたことか——而も私は未だ思ふ事の、云はなければならぬ事の百分一をも云はなかつた、未だ自分にも如何なる事か先の認が付かなかつたのであるのに……

「お嬢さんはお歸なすつたんですか？」とフラウ、ルイゼは黄ばむだ眉を額へ鈎上ける。

私は馬鹿な面をして其面を見てゐたが——ふいと室を出て了つた。

(106)

町を抜けて、直ぐ田圃へ出た。残念で、物狂ほしくなるほど残念で、膈を搔きられるやうである。種々の繰言を言つて、我と我を責むだ。アーシヤが出逢の場所を變へたには譯があるのに、それをも悟らず、彼老婆の所へ來るのは何程辛かつたか知れぬのに、それをも察せず、アーシヤの出て行くのを見ながら、それを留めもしなかつたとは——我ながら我心が解らん。あの奥まつた薄闇い室に相對でゐた時は、氣強くなつて、アーシヤの纏るのを突退けたばかりか、其罪をさへ數へ立てたが、今はアーシヤの面影に追廻されて、心で謝罪をいふ始末である。蒼ざめた面、棒々した濡んだ眼、傾けた首筋に亂れかゝつた髪の毛、胸に密と觸る頭——あゝ憶出せば胸は沸返へる。「死んでも可いわ……」と幽に云つた其聲が、未だ耳元に聞こえる。「けれども予は良心通り做つたのだ」と我と我を慰る其側から、「何の良心通の事

があらう！ 予は果してあゝしてアーシヤと分れようと思つてゐたのか？ 果して分れ得ると思ふか？ いやさ、アーシヤを手放し得るかといふに？ 馬鹿め！ 白痴め！」と憤然として喚いた。

その中に夜に入つたから、兎も角も足疾にアーシヤの宿へ往てみました。

十八

ガギンは出迎に出て來て、まだ遠方から、

「妹にお逢ひでしたか？」

「最うお歸りなすたでせう？」

「いゝえ。」

「まだお歸りなさらんのですか？」

「まだ歸りません。私は、濟まん事だつたが、何分我慢がしきれんで、お約束には

(107)

違ふが、禮拜堂まで往つて見ました。ところが彼處にはどうも居ないやうでしたが、参らなかつたのですか？」

「彼處へはお出でなさらなかつた。」

「ではお逢ひなさらなかつたのですか？」

「お目に懸つたと、サどうも言はない譯にいかなかつた。」

「何處でね？」

「フラウ、ルイゼの所で。一時間ばかり前に、お分れ申したのです。最うお歸りなすつた事と思つてゐました。」

「では其内に歸るでせう。」

家内へ入つて、椅子を駢べて坐りは坐つたが、二人とも黙つてゐる。雙方とも甚だ極が悪い。間なく振返つては戸口を眺めて、聞耳ばかり立て、居たが、その中にガギンは突と起上つて、

「如何したんだらう？ 氣が氣ぢやない。眞個に弱らせて了ふ。探しに出て見ませうか？」

連立つて戸外へ出て見れば、日は最うとつぶり暮れてゐる。

「如何いふ談話を爲すつたんです？」とガギンは帽子を目深にかぶり直す。

「お目に懸つたのは五分ばかりの間だつたが、かねて申合せた通りのお談話を爲たんです。」

「かう爲ませう。別々に探して見ませう。その方が早く見附かるかも知れん。而して兎に角一時間経つたら、また此處へ入らしつて下さい。」

十九

ガギンに分れて、足疾に葡萄園を下りて、町へ飛んで行つて、急々と辻々を経巡つて、残る方なく尋ねて、フラウ、ルイゼの家の窓をまで覗いて見て、それから又

ラインへ引返して来て、岸傳に駈出した……をりく、婦人の姿を見掛けるが、アーシヤは何處にも居ない。最うかうなると、残念はさて措いて、内々心配で耐らん……いや心配ばかりなら可いが、後悔もすれば、悲しくもなる、戀しくもなる——それも普通の戀しさではない。憂ひ悶えて、闇の中を彷徨ながら、初は小聲が次第に大聲になつて、アーシヤの名を呼んでみた、彼を愛するといふことを幾回となく繰返へして、未來永劫離れまいと誓つた、最一度あの冷たい手を握りたい、あの細い聲を聞きたい、あの姿を面りに見たい、若うそれが叶つたら、死んでも恨はないとまで思つた……アーシヤは殆ど手に入つたのである、斷と心に決する所があつて、露ほども偏氣のない真心を傾けて、此私に靡かうとしたのである、まだ誰の手にも觸れぬ、謂はゞ、春華のやうなものが、その喉初めたばかりの所を、此私に摘ませんとしたのである……それを私はちつと抱緊めることをもせず、彼可愛らしい面の雲を霽らして、染々と嬉しがる風情を見ようと思へば見られたものを……あ

あ情ない事をしたと思へば、殆ど狂せんとするばかりになる。

幾ら腕いても詮のないので、悲しくなつて「何處へ往つたんだらう、如何したんだらう？」と云つてゐると……何やら白い物が河岸に瞥と見える。其所は私の善く知つてゐる所で、七十年許前に水死した者があつたのを葬つて、その標に古風な文字を刻むだ石の十字架を建てたのが、半ば地中に埋れてゐる所です。私は胸が冷りとした……十字架の在る處まで走り着くと、白い物は何處ともなく消え失せて了ふ。アーシヤと云つて、我ながら我聲の懐いのに驚いた——けれども誰も何とも應じない。

若しやガギンが搜宛てゝはるないかと思つて、一先引返へしてみることにしました。

倉皇と葡萄園の徑を上ると、アーシャの室には燈火が點いてゐる……それを見て私は少し安心した。

住居近く来て見ると、樓下の戸は閉切つてあつたから、敲いてみました。すると側の眞闇な室の窓が開いて、ガギンが面を出した。

「見附りましたか？」

と尋ねると、小聲で、

「歸つて来ました。今室で衣服を着改へてゐる所で。先づ何事も無いやうです。」

「それは好かつた！」と餘りの嬉しさについ大聲に云つて、「それは好かつた！先づ是で安心した。けれども未だ篤とお談をせんければならんが……」

「他日の事に願ひませう」と云つて、ガギンは密と窓の戸を引寄せて、「他日の事に今晚は是で御免を蒙むらう。」

「では明日また。明日は全然御相談を決めませう。」

「左様なら。」

窓は閉つて了つた。

私はアーシャと結婚したく思ふことを今茲でガギンに云つて了はうかと思つたら、あはや窓を敲かうとした。けれどもこんな時にそんな事を……えい明日まで待て、と思案を爲かへて、明日は予も幸福兒になるんだ……

へッ、明日は予も幸福兒になるんだ！幸福といふものには、明日だの昨日だのといふことの有るべき筈はない、持越した幸福といふものも頓と無いことなれば、取越した幸福といふこともついぞ聞かんことだ、若し幸福なら、現在が幸福なので——それも一日間と續く譯ではなく、幸福だと思つた其瞬間が幸福なのである。

如何して宿へ歸つて来たのか、覺えがない。歩いて来たのでもなく、舟に乗つて来たのでもなく、何か魔物のえらい力の有る翼に煽られて来たやうな心地がする。灌木の生茂つた傍を通ると、鶯が啼いてゐるから、立止つて久らく聽惚れてゐるが、

驚までが吾の戀や果報を歌に詠つてゐるらしく思はれた。

二十一

翌朝例の家近く来て見ると、不思議な事もあればあるもので、入口の戸は云ふ迄もなく、窓といふ窓が悉く開放しになつてゐて、關外には何か紙屑が散つてゐる、戸の蔭には帚を持った婢が見える。

私の近づくのを見ると、未だガギンは居るかとも云はぬ中に、婢が頓狂な聲で、
「もうお發足になりましたよ。」

「えッ、お發足になつた？ 如何して？ 何處へ？」

「今朝ほど、六時で御座いましたか、何處へとも仰しやらずにお發足になりました。ちよいと、あの旦那は某様と仰しやりはしませんか？」

「然うだ。その某だ。」

「そんなら確か旦那への置手紙が主婦さんの許にある筈です」と二階へ上つて行つたが、聽て手紙を持つて降りて来て「是で御座います。」

「そんな筈はないが……如何したといふのだらう？」

婢は怪訝な面をして吾の面を見てゐるが、又掃除にかゝつた。

封を切つて見れば、ガギンの手紙ばかりで、アーシヤは一筆も残さない。ガギンの手紙には先づ突然に發つ無禮の謝罪から書起して、然しながら私にしても、熱く考へたら、彼の仕打を悪いとは思ふまい。此儘にして捨置いたなら、遂に進退谷まつて、如何いふ事にならうも知れん。それを然うならせまいとすれば、他に策も無からうと思ふ、などいふ事が書いてあつて、それからこんな文句もあつた、

「昨夕兄とアーシヤの歸るを待ち居候 際生は別離の已み難をつくづく」と感じ申候 世には偏見ながら一概に擯斥すべからざる意見も可有之存じ候へば兄が愚妹と結婚を憚り給うこと強ち御無理とは存じ不申候 何事も總て愚妹より聞取り申

候彼も今は此地を去らんの望愈々切となりて頼に生を掻口説き候故聊か彼の心遣りともならばとて生も遂に其望に任せ申候」

末には折角の友をかう臨時にして失ふのを本意なく思ふ事、影ながら私の幸福を祈る事、別に臨むで親友として握手する事などがつどく書いてあつて、さて何卒吾々を捜して呉れるな、としてある。

「偏見とは何だ？」と私は宛らガギンが傍にでも居るやうに喚いた、「人を馬鹿にしてゐる！ それに誰が許してアーシヤを奪つて行つたのだ？……ちツ……」と云つて、我と我頭にむしやぶりついた……

婢が大聲を立て、主婦を呼立てる、その聲が耳に入つて、漸く我に反つたが、さてかうなると、彼等二人のものを尋ね出さう、草を分けても尋ね出さうの念が炎え上る。こんな目を見ながら、此儘に泣寝入にして濟まされん、主婦に聞けば、朝の六時に汽船に乗込んでラインを下つたといふ。事務所へ往つて聞けば、キヨル

ン迄の切符を買つたと云ふ。そこで直ぐ荷物を取纏めて跡を追はうと思ひながら、宿へ歸るとしてフラウ、ルイゼの家の前を通ると……ふと誰やら私を呼ぶ者がある。仰向いて見れば、昨日アーシヤに逢つた彼の室の窓から、例の老婆が厭らしい笑顔を出して私を呼んでゐる。素知らぬ面をして行過ぎようとする、何か預り物が有ると云つて呼ぶので、しぶく其家へ入りは入つたが、また其室を見た時の私の心持は如何なでしたらう！……

老婆は小さな書付を出して、

「本當は貴君の方からお過なすんだんでなければ、呈けるんぢやないんですけれど、貴君が餘り御様子が好いから、呈けませう。」

受取つて見ると、小さな紙片に鉛筆で走書にかうしてあつた。

「最早かさねては御目もじえ叶うまじと存候まゝお暇乞までに一筆書き残しり、此度俄に出立いたし候はさらく口惜しき故にてはなく唯詮方なきまゝにござ候

昨日はづかしくも取亂したる様を御目に懸け候をり只の一言仰せ下され候へば私とても心強くは歸宅せざりしをと存候へどそのをり何の仰せもなかりしは是非もなき御事に候されどその方反てお互さまの身のためかも知れず候今は永のお別に候かしこ

只の一言……あゝ私は痴漢である！ 此一言を昨日泪ながらに、人氣のない野原で、何の効もなく言ひ散したが……アーシヤには其一言を聞かさなかつた、私は彼を愛するといふことを云はずに了つた……彼時は實以て言得なかつたのである。彼一期の浮沈の定らうといふ室でアーシヤに逢つた時は、まだアーシヤを慕つて居るとは思はなかつた。ガギンと相對で、極りの悪い想をしながら、まじりくしてゐた時も、未だ然うとは思はなかつた……確に然うと思つたのは、それから少し経つて、非常に氣遣はしくなつて、アーシヤの名を呼んで尋ね廻つた時で、其時始めて戀しいが心を衝いて沸上つて、抑へたいにも抑へ切れなかつた……が、既う晩かつた。

そんな筈はないと云ふ人も有るかも知れぬが、有るか無いかはさて置いて、實際どうも然うであつたに違ひない。若しアーシヤに露ほども浮いた心があつて、身分も通常であつたならば、發ちはしなかつたらうが、餘の者なら忍び得る事でも、彼の身では忍び得なかつたのである、そこに私は心附かなかつた。薄闇い窓の下で最後にガギンに逢つた時、口まで出懸つた言葉はあつても、碌でもない考に攔られて、未だ取留めようと思へば取留められた縁をも、遂に取外して了ひました。

其日の中に荷拵をして、再び某町へ来て、キヨルンへ出立しました。忘れもしない、汽船が岸を離れようとする時、一生忘れまじき此町や此界限に心中で名残を惜しむでゐると——ふとハンヘンの姿が目に入りました。未だ色光澤は好くなかつたが、愁氣は無くなつて、河岸の床几に腰を掛けてゐる、その傍にはなかく、男前の好い若い男が立つてゐて、笑ひながら何か談話をしてゐました。對う岸にはマドンの像が小さくなつて、相變らず秦皮の葉越しに、悲しさうな面を出してゐまし

片 戀 た。

二十二

キヨルンで少し手懸を得て、兄妹の者はロンドンへ往つた事が判つたから、直様跡を追蒐けて見たが、何程手を盡くして尋ねて見ても一向判らなかつた。それより久しい間私は諦めることが出来ずして、尙ほ強情に尋ねて見たが、結局は尋ね出さうの望を絶たなければならなかつた。

といふので私は再び二人の者に邂逅ふことが出来なかつた——アーシヤに逢へませんでした。ガギンの噂は仄に聞いたことも有つたが、アーシヤの行衛は遂に判らずに終ひました。それより數年後の事であるが、或年外國へ往つた時、汽車の中で忘れぬアーシヤの面相に其儘といふ婦人を瞥と見掛けたことが有つたが……恐らくは他人の空似に欺されたのでせう。私の記えてゐるアーシヤは若い頃見たまゝの

片 戀

娘で、低い木造の椅子の脊に倚懸つた姿を見たのが見納であつたが、其時の娘です。然しながら、實際を云へば、アーシヤを失つたからとて、私はさほど永くも鬱いではゐなかつた、のみならず、アーシヤと一所にならなかつたのは寧ろ好かつた、あんな女を妻に持つては恐らく幸福ではあるまいと思つて、自ら慰めたほどである。私は其頃は未だ若かつたので、未來といふものは過去つて見れば早い短いものであるが、それを際限もなく永いものゝやうに想つてゐた。何の、こんな事は未だ幾らもある事だ、まだく之よりも嬉しい面白い事もあらう……と思つてゐた。其後婦人とも多く交際して見たが、アーシヤに逢つた時のやうに、心も蕩然となつて、深く思焦れたことはない。なか／＼以て！ 誰がどんな眼をして見ても、アーシヤが情を籠めて見るやうなことはない、誰に取籠られても、此方の心もそれに感じて染々嬉しいと思つたことはない。妻も子もなく家をも成さずに、一生獨居と運が定つて、私は今淋しい月日を送つてゐるが、アーシヤの手紙と、それから今は乾び

て了つたが、昔アーシャが投げて呉れた風呂草の花とは今だに重寶のやうにして藏つてある、花はまだ微に残香を留めてゐるけれど、それを投げて呉れた人の、後にも前にも僅た一度私の唇に觸れた手は、今頃は最う疾くに土に歸つてゐるかも知れん……私とても——今は老込んだ。昔の我も、面白く心の噪いで娛しかつた歲月も、止所もなく狂つた希望も意氣も——今は皆痕跡も無くなつて了つた。之を思へば、果敢ない草花の幽かな香でも、人の喜憂よりは永く保もので——だから人よりも壽命の長いものです。

ふるさとの蟲 (ヨリキイ)

夜祈禱を済してから、粉屋のチホンはやつとこなと上衣を脱いで下衣一枚になり、脊中ぢゆうをほりく搔きつゝ寢臺の側へ來た。で、口の中でなむみだぶくといふのが、頓て大きな欠びになつたところへ、透さず十字を切掛けて、颯と形附更紗の帷を引くと、其處に古女房の大柄なやつが鹽梅よく夜着に包まつて臥てゐる。眠くさつて死人のやうになつた肥胖のその寢姿をチホンは熱々眺めて、宛で吹簾の向面だア、これ、と呟くやうに言つて、彼方向いて、卓の上の燈をフツと吹消し、藁小屋さ往ぎて眠べえちうに、どんねえしても往ぎをらねえ、忌々しい老婆だ。さア、些とンベえ其方へ寄れと又口小言いつて、拳を固めて、グイと女房の脾腹を一突き突いて、さて夜着をも掛けず、其儘側へごろりと横になり、又一度手荒く肘を喰はす。女房は含糊と身動きして、臥返り打つて、又しても高駟をかき出すので、チホ

ンは忌々しさも忌々しく、吻と太息吐いたが、偶と帷の隙から月光に聖像の御前の御燈が光り負けて、其影が天井を這ふのを見つけて、それに熱と視入る。庭からは習々と生温い夜風が開放しの窓へ吹入つて、さやくと木の葉のさやく音、土の香もすれば、今朝がた剥いだ赤馬の生皮の、物置の壁に張着けてある、その臭もする。水車の水の滴る音は徐かに銀鈴を鳴す如く傳ひ來て、土手向の森に啼く青莊の聲は唸るのかと思はれて物凄く、之が次第に消行いた後は、此聲に脅かされた如くに木の葉が一段とさわ立ち、何處やらにブーンと心細い蚊の聲が聞える。

チホンが天井に這ふ影から眼を離して、室の向うの隅に移せば、其處には御燈の火先が風に瞬いて、煤けた救世主の御顔の或は明るく或は暗く、宛然深い物思ひに沈んでゐらるゝやうに拜まれるので、彼は深く太息を吐いて、へつたやたらに十字を切つた。

何處やらで鶏が啼く。

「ほう、もう十二時だか、と驚く間もなく、又鶏の聲。引續いて其處でも此處でも歌ひ出して、聴て壁一重隔てた所で、赤鶏が聲一杯に景氣よく時を作ると、鳥小舎の黒鶏が之に鳴合せ。之を機に小舎中の鶏が皆騒ぎ出して大きな聲でかけかまひもなく鳴立てる。

「チヨツ、忌々しい畜生めらだー やかましくツて、へえ、眠られやしねえ。」
と臥返りを打つた。

さて口小言を言つて見ると、何となくそれで氣が休まる。此頃町へ出てから以來、譯もなく氣が結ほれて、けたいがわるくて耐らぬけれど、憤るとそれが幾らか治る大に憤ると、大に氣が霽れるけれど。生憎と此二三日は萬事が調子よくトン／＼と運んで、がみがみとやつて氣を霽したくも、やつてのける機會がない。旦那の御機嫌宜からずと見て取つて、家内中の者皆用心して、何さら落度を見せぬ。剩さへ皆が今にも破裂するかとハラ／＼して、始終頭の支へたやうな晴れぬ面相で、成るた

け旦那の眼に留るまいと逃避つてゐる其様子を見れば、いつになく氣が引けて少しは濟まぬやうな氣にもなると、忽ち町から隨いて來たふさぎの蟲がかぶつて來て、引入れられさうな厭な心持になる。

此頃雇入れた粉挽に、アリヨール生れのクジカ、ヨシヤークといふのがある。口減らすの、負けぬ氣で、随分と衝懸りもする代り、眼の色青く、威勢よく、動もすれば無禮すぎた冷笑に頸の實の如き白い齒を見せる逞ましい若衆で、これが毎も旦那の怒罵の的となるのであるが、これさへ此頃は何となく小さくなり、言語も慇懃なら、くれ／＼と能く働き、曾て自慢の鼻歌もつゝじらず、存外旨い洒落を八方へ撒散らさぬやうになつた。チホンはこれの此様子を見るにつけ、やれ／＼己も好い鬼になつたわいとうんざりして、例の心魂にへばり付いたふさぎの蟲に、益々生血を吮立てられて、どうにもハヤならぬことになる。

チホンは時々我身の上を顧みて得意になる癖がある。此癖が始まると、毎も我家

の富めること、我身の村人に奪まれる事なんど、我ながら我に感心するやうな事ばかりを、絶えず心頭に思ひ浮べては故意と此心持を育てるやうにする。チホンの此癖は家内中の語草となつてゐるが、さりとて是は虚榮心とも限らぬ、たゞ家内安全息災延命と、人生の福を享け得た者が、その福の福たる所以を能く翫味して、成るべく遣る所なく一杯に満足したいといふ慾に過ぎぬかも知れぬ。兎も角も此心持になつた時は、物を観るにも一種の見地を生じて存外好意の多い人となるから、取込まれる利益を逸すやうな事はせぬが、知人間では氣前の好い情深い人として知られてゐる、然るに一旦忽然として此十年不退轉の自得心が何處へか失せてなくなつて、それに交代したのが、會て喰つけぬ得體の知れぬ此頃の厭な思ひ……

「チヨツ、忌々しいなあ」と呟きつゝ、窓外を習々と渡る夜風の音に聽入る。羽布團の溫りに體はほてつて息氣苦しく、身の置處なさうに臥返打つて、又しても女房を罵つたが、ふと兩脚を寢臺がらぶらさけて、やつこらさと起直り、さてブル

りと汗ばんだ顔を撫でた。

此處からは一里許のボロトノエ村の夜番の鐘が響き渡る。哀れなる青銅の音が鐘を離れて徐かに空中を濺ひ、頓ていつくともなく消失せる時、園の木枝の折れる音がして、更に鳴き出す青莊の聲、陰氣な含聲で何を笑ふかと怪しまれる。

チホンは寢臺を降りて、窓際へ来て、其處の皮張の椅子に深く腰を卸した。これは此頃隣の地面持の婆様が破産した時、唯の二留で手に入れた椅子であるが、その冷切つた皮が身に觸れた時、彼は慄然となつて其邊をきよろ／＼と顧視した。

何となく薄氣味がわるい。月は窓外の楓の枝を潜り、窓の植木の花越しに射込んで、床に朦朧たる花木の影を印してゐたが、それが折節の風に婆婆とゆらめく、尙ほ其影の心になる一ツの影を見れば其形髣髴として椅子の舊の持主の婆様の頭を憶出させる。競賣の時見たと變らず今もほやけたやうな黒い帽ごと、恨めしさうに首を振り／＼、老の口元をむぐ／＼させて、

「些とは、お前さん、後生を思はつしやい。お老父さんが亡なる前に、十八兩で買った椅子でござるによ。まだツイ此頃買ったばかりだに、一兩二分たあんまりあこぎな附方ぢやござらぬか。」

と言はれるやうな氣がして、さういへば、髪を蓬と振亂した、死んだ爺様の大頭が、ツイソレ其處の床の上に、アレもぢやく／＼髻が……

「なむまみだく」と又しても太息が出たが衝と起つて窓の植木を床に卸し、其跡へ腰を掛けた。床を這ふ花の影は益々鮮かにクツキリと浮いて見える。

外面は静かで心淋しい。庭の木立の寂と鎖まつた姿は、何か斯う隙間もない一團の眞黒けな物で、奥には何が潜むかとおそろしく、水車の水を吐く音は、いつも同じ調子に四邊の寂寞を破つて、根氣よく物の數でも讀んでゐるやう。つい窓下でひよろ長い錦葵の莖が眼むさうに揺つく。チホンは十字を切つて目を瞑つた。目を瞑ると、町での一件が次第に眼の前に浮いて来る。實は此一件から全然調子を狂はさ

れて了つたので。

二

まづ、夏の日の一杯に射した町中を、埃を蹴立て、葬式の行列がしづく／＼と練つて行く。導師の法衣は爛として見るに眩ゆく、伴僧の擡けた香爐の蓋は、歩みを移すごとにこと／＼と鳴つて、蒼煙一道裊として空に消行く。

導師は小作の老僧で、細い聲で、

「かしイ……」

と唱ひ出すを、脊の高い黒衣の伴僧が、太い破鐘のやうな聲で、

「こチキイ……」

と引取る。これは髪の中の濃く黒い、大きいけれど毒の無い眼付の坊様で、その眼に又しても／＼莞爾と笑を含む。

ふさぎの處

「御神イ」と二ツの聲が一ツに絡んで、うはの空へと消行く。仰けば照る日眩ゆく眼を射るのみで、茫々たり沈々たる空の氣色。

「常にぞヲ在するウ……」と伴僧が思切つて聲を振絞つた。遠慮して打ひそめたる會葬者の話聲はいふに及ばず、大勢の足音も、砂利路を軋み行く馬車の響さへ、皆一時これに消壓されてバツタリ聞えなくなつた後で、伴僧が髣だらけの顔で、見物人の方を振向き、大きな眼を一杯睜いたところは、如何だ、好い聲だらう、とさも言ひたさう。

棺に臥かされた亡者どのはフロックの紳士で、臨終の時小工面らしい面相をしたのが、其儘其處にこびり付いて了つたやうな瘦削た尖つた面であつたが、それが棺の揺るたびに、グタラクと他愛もなく動く、それをチホンは一目見るより太息吐いて、例の十字を切り、見送人のぞろぞろ行く勢につい誘はれて、我もいつしか棺の後に隨いて歩いてゐたが、例の伴僧の聲といひ、身體といひ、圖抜けて大きいの

に兎角目を惹かれて、動もすれば其方ばかりを見てゐると、伴僧は讚美歌の合間合間には傍の人と何やら饒舌りながら練つて行く。この伴僧とても人の世の運命は免れ得ぬ筈、頓ては是も町中を擔がれて何處の土にか埋られて了ふのであらう、其時はもう棺の中で矢張このやうに首を振るばかりで、低い聲一ツ出されまいに、今は目のあたりにこれの亡者を見ても、一向平氣なものである。

と思ふと、伴僧の氣樂さうなのが、見るも忌々しくなる。立佇つて多くの人を遣り過し、さる中學生らしいのを捉まへて、

「一體誰方のお葬式だか、お前さん知らんねえだかね？」

とやつてみたが、中學校の先生チロリとチホンの面を視たのみで、無言で匆々と行過ぎて了つた。

チホンは面を膨らして、

「何だ、青二才の癖に年寄イ馬鹿にしくさつて、生意氣な！ 手前らに聞かねえと

ふさぎの處

つて、些とも困るんぢやねえぞ、この自然生野郎め！」

また歩き出して、更に棺側に附く。棺は四人して擔いで行くのであるが、急足に而も拍子を取らずに行くので、一人の擔手の鼻眼鏡が又してもく落こちるのを、取つては箆め取つては箆めする其度に、馬の鬣のやうな赤毛の濃い頭髪を、ハラリハラリと拂ひあける。

チホンは之を見て、

「えら軽い亡者と見えるな。官員様だツペえ。官員様だら、瘦削てるに不思議イねえだ。」

皆匆々と足早に行く。どうやら今日の亡者といふのは存生中から皆の揃みで、もう斯うなつたら構ふこたねえ、匆々と片附けつ了へ、と言はぬばかり。チホンも遂にそこに氣が附いて、

「これぢやハア宛然逐ひこくるやうだア、これ。こんねえ急がねえとつて、好さ々

うなもんだに、モノ生きてる中にや、何だとか角だとかこきをつたとつて、おッ死んだや、もう是だ。匆々と穴さ投込ぢまへ、此方等ア忙しねえ身體だア、と來るだ。」かう思ふと何となく心細くなる。此身も死ねば此通り、矢張り引擔がれて行くのであらうが、それも然う間のある事でもあるまい。今年はこれ四十八だ。

「おゝや、えらい物が有るぞよ」とチホンの驚いたのは、棺の蓋にかざしの花環が取付けてある。其外、何やら金字で題詞のあるリボンも見えれば、生花なんども雜然と。

「矢張えらい人に違へねえだ。そんだのに此送人は何とした事だつペえ？ 皆えらみとむねえ服装ばかした……誰方のお葬式でガンスね？」

と問ひかけられたのは、此時側を押並んで行く眼鏡の紳士、題辭に渦を捲かせて、こればかりは如何やら清楚した服装。

「さる文士でな……」と其紳士は小聲に答へたが、チホンの風體を視廻して手取り

早く、「矢張本をな、拵へてた人で。」

「へえ本を……知つとりますだ、かうめえてもニワ（繪入雜誌）を取つとるでがンすよ、矢張女が讀むんでな。へえ、本を……えらい人でがンしたらうな？」

「いや……さうえらくもない……」と紳士は微笑を含む。

「でがンすかな……いや、しかし、えらいお方に違へねえだ。えらいにも種々あつて、お天道様はお天道様だけ、お月様はお月様だけにえらい。お星様にもそれぐ位が有るつていうでねえかね。何といつても花束でこれ送られる人だ……どうも今日はいに暑い事でがンすな。」

何故とは知らず急に胸が逼つて来て、何だか斯う心の臓を斯う捻られるやうで、何だか締付けられるやうな厭な心持

聲自慢の伴僧が相變らず太い聲を張揚けて、

「かしこヲきイ、おほん神イ……」

と唱ふ其聲の下より、導師の老僧の細い震聲が、低く、遠慮がちに

「我等をヲ憐み給へ……」

大勢の見送人の足音が陰に籠つて、蹴揚げの塵埃は道を舞ひ、亡者の首を掉るゝと頼りなるところを、七月の油日照で、上からは用捨もなく照付ける。

チホンは何だかもう滅入つて了つて、考へる氣にもなれねば、話をする空もない。皆がまぢりくくと浴えぬ面をして行くについ釣込まれて、我も隣の人と足拍子を揃へて行きながらも、絶えず胸の何處か奥深い處に潜む齷齪の蟲めに責められてゐたが、責められる儘に責められて、強ちそれを免れたいとも願はず、亦敢て免れようとすほどの氣の張も出ないのであつた。

墓地へ着く、穴端で行列が止まつて、土を小山のやうに掘上げた上へ棺を卸す。不器用な人達のする事として、其時亡者はガクリと倒懸つて、またガクリと舊の位地に戻る。それを側から視てゐれば、宛も亡者が其處ら一遍見廻したやうにも思はれ

て、若し生きてゐたら、差結、やれく辛と首振りの役済みか、有難い、やがて陽乾の御難も免れようといふところ。それよりして、伴僧は夢中になつて、又讚美歌で四邊を唸らせ、導師も之に負けじと勵めば、誰やら會葬者の中でねツから汗えぬ聲で其際に隨く者もあつた、三ツの聲は灌木を潜りつ、瘦枯れた木立の間を脱けつ、隠々として墓地を遶つて、チホンは愈々引入られさうな心持になる……折しもあれ……

是からが肝腎かなめの處

衝と穴端へ進み出た紳士を見ると、先刻がた物を言つた彼人。先づ手で頭を撫でて、さて、

「諸君！」

と言つた、その音調が妙に響いたので、チホンは之に脅かされて、愕然となつて、直と其面を見る。紳士の眼は妙に光つて、或は棺に注ぎ、或は聴衆を見廻し、諸君

から本題に入る迄のその長さに、其場に居合せた者皆鳴を鎮めて森と露の降りたやうになつてゐると、やがて優しい、陰氣な、引入られさうに悲しいく聲で演説が始まる。眼鏡越しに眼を光らせ、軽く手を振つて拍子を取りつ、辯ずる辯士の言葉は能くは分らなかつたが、何しても其演説に據ると、今日の佛といふのは、二十年の永の歲月を、兀々として撓みなく世の文教を裨けた人であるけれど、傷ましいかなや始終文なしの、女房の味をも知らず、身は一生日陰のすがれ花となつて、精盡き根竭きた散際には、便りない身を病院に託して、死水を他人に取つて貰つたのだといふ。聞けば聞く程哀れな身の上に、益々氣の滅入るを覺えたチホン、しげじげと亡者の力の脱けた瘦顔を眺め、小作な、蒲柳な、シヤチコばつた姿を眺めてゐる中に、偶然釘のやうな人だと思つて、我ながら我見立の可笑さに微笑む時、恰も辯士は一段と調子を高めて、「不幸に不幸を累ねて此人は、遂に運命の手に拉がれたのであります。人の爲め、總ての人類の爲めに、此世に天國を打建てんとして、

其礎を置く榮なき事業に一身を獻けながら、世の人からは感謝の詞一ツ聞かずして、此人は遂に死んで了つたのであります。」

と辯じ去つて熟とチホンの面を見詰ると、其處には微笑が漾つてゐたので、ギロリと目を光せる。やれ濟まなかつた、佛様に對しても、其噂をしてゐる此旦那に對しても、笑つては濟まなかつたと心附いてみると、チホンも何だか狼狽氣味になつて思はず逡巡をした。

日は斟酌もなくヂリ／＼と照付ける。仰けば蒼天は深々として深く思ふ所あるが如く、俯せばこれや死人畑とも謂ふべき處に、新しき墳穴を圍んで群り立つた一團の人影、其間に在つて辯士の聲はしんめりと悲し氣に響く。

チホンは頻りに首を回らして、密かに四邊の人の顔色を窺がへば、どれも／＼皆打濕つた面相ばかりで、氣を滅入らしてゐるのは、獨り我のみでもないらしい。

「我々は今日の煩ひに靈魂の所在を取失うて、靈魂なしに生活して居るのであります。」

す。で、我々はその靈魂なしの生活に慣れ切つて了つて、殆ど木石のやうになつてゐる、無神經である、死人であるが、それすら常に忘れてゐる。であるからして、此人のやうな人は、我々の到底了解し得ぬ所の人であります」と辯士は言ふ。此人とは亡者の事で、此旦那の言はしやる所では、我々も魂が藻脱けの壳なら、矢張りソノ亡者だとある。

「成……然うだ、それに違へねえだ。己だとして、へえ、魂持つてゐること、がら忘れ了つとつた。」

と其時獨語を言つたツけが……

三

吻と溜息をして眼を開けば、折しも生温い風が園から窓へ吹入つて、露けき草や花の香に、池の腐れ水の臭氣も雜つて、物思ふ衣袂を襲ひ、床の花木の影に一しき

り烈しく揉返して、宛然脱出て逃げもしかねまじき氣配を見せる。起上つて安樂椅子を窓際へ押寄せ、こなたの寢臺へ来て見ると、散々羽布團の上を輾轉まはつてゐた女房は、此時太い腕を床一杯に投出して、鼻に險しき音を立てつゝ、高駢してゐたが、その腕といひ、胸の暴露といひ、今宵ばかりは何とやら淺ましいものに思はれて、見るも胸悪く覺えたから、手荒く夜着を女房の體へ投掛けて置いて、さて枕を持つて窓際へ来て、其枕をば窓の上に載せ、これに肱を持たせて、又物を思ひ始めた。かの葬式以來何だか生れ變つたやうな心持がして、我はいつもの我に相違ないが、さりとして他人のやうに思はれぬでもない。

首を掉つて獨語つやうは、
「やれ、チホンよ！一體何とした事だ？ しつかりさつしやいお前でもねえでねえかね。」

何を責めたのやら？
昔の放心を嘲つたのでもなければ、今の憂き我を憐んだの

でもない。忽然として憶起したのは、例の葬式の日墓地の上を高く飛んで行つた白鳩の一群。何故之を憶出したのか、分らぬ。眼を瞑つて顯然と蒼空に白きものゝ點々するを見て、更に思ひ續ける。

「これぢや耐ねえ、毎日々々こんねえ鬱いでた日にや、命が續かねえだ……」

四邊の明るいことは、物の形も際立つて見える程で、而も此夜の靜かなることは、森と鳴を鎮めて何を待つ所あるが如くに思はれる。一向に喰付けぬ、物騒な、厄介な屈託が頭の中に押合ひ、壓合ひ、消えては顯はれ、顯はれては又消えする中に、益々嵩張り來つて愈々荷になる。喩へば晴れ渡つた夏の空を、一片の斷雲が走り過ぎて、彼方の空に消えるかとすれば、又一ツ顯はれ二ツ顯はれ、果は累合つておそろしけな夕立雲となつて地に垂れ、遠音におどろくしき音も聞えて、尋常ならぬ空の氣色となるやうに、チホンの胸も屈託の雲に鎖される。物思ふ身になつてからは、曾て覺えぬ心癖が着いて、窃に所有ものに目を注げ、そのまた觀た所を確と心

に留めて置いて、さて之に「何故」といふ問を添へるようになった。

世には物思ひに平生の調子を狂はせぬといふ保険附の人もないものなれば、誰とてこの無慈悲な「何故」といふ問に掛つたら最期、皆道理なくも世をあぢきなく思ふようなる。

「我々は自分の靈魂を酷く扱つて居るのであります」と辯士の呼はつたのを憶出して、粉屋は針鼠の如く總毛立つた。辯士は感慨に堪へぬ氣に斯う呼はつて、さて悲しさうに微笑としたつけが、成程考へて見ると其に違ひない。

「全だ、此方等の魂は死でも同然だ。それといふが稼業がわるいだ、稼業にかまけるもんだアから、魂の事なんぞ考へて暇アねえだ。ところを魂との偶然とソノ……やア一撥イ起した。ね。此方に油断有つたもんだアから、魂との其處へ附込んで、騒ぎ出した。皆稼業が悪いだ。あんの、これ、どうせ一度はおツ死ぬ身で、何も汗みづく垂らして醒醒することねえ。醒醒したとつて、おツ死ぬ時節が來りや、お

ツ死ぬだ。おツ死でから手振で神様の前へ出られねえ。魂持つて往かざらにやア。そんで魂どのが人間に意見して呉れツしやるだ、こウれ、人間共、もう好加減に目え覺せえやい、何時おツ死ぬも知れねえ生身でねえかとつて……ほんに然うだ、何時おツ死ぬも知れねえ生身だア、これ……やれ……情ねえ事だぞ。」

と慄上つて、十字を切り、思はず室の隅の救世主の御顔へ眼を遣ると、御燈の火先の影がちらついて御顔は微暗く、端然として何やら深いく思ひに打沈み給へる如く拜まれたので、粉屋は胸に氷を懐く想ひ。さうでもない、今、只今……うんにや、明日……明日偶然死なうも知れぬ。能く有るやつだ、病氣でも何でもない者がころりと行つて了ふといふ事は……

「アンナよー」と思はず聲が筒脱けて女房を呼ぶ。「アンナよ……己にや如何しても言へねえ事がある。此處ン處まで出かけてる事だけんど、如何しても言へねえ……アンナよ、些とんべえ眼え覺せやい。己が此様弱つてるだに、ぐうすらく眠てば

(146)

ツかけつかるだ。」

けれども女房は死人も同然、一向にお通じなしなので、其儘に放棄して置いて、チホンは衝と起つて上衣を引掛け、女房の躰を後にして室を出で、出口の處で一才躊躇り、さて徐に庭に降立つた。はや夜は明方の東の空も白み渡つて遙かの天の一方には、凍付いたやうに動かぬ鳩羽色の雲の端が、朝やけに赤々と染められて見える。朝開の風は徐に楓や菩提樹の木末を渡つて、眼にはさやかに見えぬけれど、其處ら一面に置渡す露。何處ともなく水鶏の聲がして、池向うの森では椋鳥が心細く鳴く。冷々とするから、鳥も寒いのでがな。

「彼旦那の頭顱の大かつた事はよ！ 定めし智慧者だんべえ。彼様した人と話ししたら、面白かつべえにな。彼や何とした譯、是や此様した譯と、チャンと事を分けて一々理解のうして呉れッしやるべえけど、己にや、はア、到底も駄目だア、己が智慧さ、其様した事にや不向だアからな。」

とその不向の頭を力なく垂れたが、尙ほ考へ休めぬ。

「ヤムキ村の先生が處さ行きで見ええかな。彼人も矢張り……釘男の仲間だアからな。和尙の話ちや、己が事新聞に出したな彼人だといふ事だが、てんこちもねえ事しる人だア。」

憶出せば小羞かしかつたのは、彼時女が新聞を読んで、始て老父がキリュシエンスコエ村の百姓に一杯喰はせた一件を知り、新聞を顔に翳しながら、小聲で問ふことには、

「阿爺さん、眞實にこんな事爲すつたのけえ？」

爾時老父憤然として大に怒れて、

「何言くだ！ 己を其様え盜賊見たいな人間だと思つてるだか？ 眞實に這麼事し

シけとは何だ。阿房め、何の爲に學校さ行くだ？」

と斯うはやつて退けたやうなもの、實のところは先生が新聞へ書いた通り。唯

(147)

女の前では其を白状したくなかつた——何が女なんぞに分るものかといふ腹があつて、然るところ、此舊罪が圖らずも半分がた帳消になつたのは、其後洪水で堤が切れさうになつた時、キリユシエンスコエ村の者が防いで呉れたは好かつたが、其時一人前三留の日傭を否應なしに腕取られた。宛然合戦の沙汰だが、油断したのが此方の誤り、如何しよう様もなかつた。其場に先生も居合はせたつけが、其時の言草がかうだ、

「如何だ、粉屋さん、見事にやられたね。」

ツて、えへらく笑ひをつた。黄ろく萎びた險相な面相で、

「何と言つても、大違算さ。相應に取込みなさるが、脱けてる所もあるね。」

業腹だが、それに違ひない。取込むと言はれても、仕方がない、脱けてると言はれても仕方がない。

「あゝ、もう好加減にお天道様出さッしやらねえかな」とくさくししながら、

「いや、もう直だんべえ、あの雲の端が赤くなつて来た。そウら段々明るくなるもう、へえ、彼様なつた。」

此時何處ともなく人の話聲が聞える。チホンは垣際へ来て、其處の乗ベンチの上に長々と横になつた。昨夜終宵まんぢりともしなかつたので、如何も氣分が悪い。人聲は明方の静かな空氣に乗つて段々と近寄つて来る……

「駄目だア、己何だつて、角だつて、もう此處は駄目だ。」

といふ聲を聞くと、チホンは吃驚したやうに起返つて、腕を杖く。聲はつい其處の垣外の接骨木の間にするのであるが、粉挽のクジカが誰やらと話してゐるのは直分つた。

(149) 「駄目だといふに！ 留めたつて己此處に居るな駄目だもん。己如何してもクバンの川越せざらにや。」

「だら私イ如何しるだかね？ 私イ汝と分れちや一日だつて居られねえがね。私

「汝よこら程思つてるだに、汝ア私が心を些とだつて汲ぢや呉れねえだもん。」

と女の細い聲でひそくと口説く。

「駄目べえ吐いてる。お前ら其様言ふけんど、己始めて色しるんでねえだよ。是迄己が事何とか思つて呉れた女ツ子も數多有つたけんど、分れツ了や、何の事もねえだ——皆嫁さ行きて燻り返ツ了つて、色も戀もなくなるだ。途中で逢つたつて、間違でねえかと思ふ程、がら變つ了やアがつて、此様した女ツ子を己何として可愛がつたんべえと思ふ位だ。皆がら鬼婆みたいに成ツ了うだ。厭な事だ、如何したとつて己一生嫌なんぞ持たねえ。如何好え嫌だつて、好え家だつて、獨身者の氣樂にや代へられねえと思へ。己餘所の家の垣根の根で生れたといふ事だアから、おツ死ぬ時も垣根の根で野たれ死と極てるだ。其様した前の世の約束だと思や、へえ、これ、何でもねえ事だ。己白髪生える迄其處いら中ほつゝき歩く積だア。一處に永く居るな厭だ。」

「だら、私よ如何して行く氣だかね？ 汝に棄てられて私如何しるだかね？ 汝ア

我が事なんぞ些とだつて思つて呉れねえだかね？」

「お前らが事だら、何とすべえようもねえ、此處へ置いてくばかしの事だ。己が居なくなつたやら、お前ら大方チエクマリョーフが所さ嫁に行くだんべえが、彼處にや先の嫌の産み付けた孩兒べえ數多有るけんど、そんなえした事關んねえだ。持人が立派な一人前のお百姓だら、そんで言草アねえだ。」

「え、よ、汝ア、私が事なんぞ何とも思つて呉れねえだから。」

と溜息つくくゝ力なさうに言ふ。

「何とも思はねえ？ 何とも思はねえもんだら、己從頭に話イしねえ。何の、これ、小面頭臭え、別話なんぞしるもんだ。誰だつて女ツ子に引掛つて暇潰イしるな、皆うツ惚れてるからだ、うツ惚れてねえもんだら、女ツ子なんぞに鼻汁もふツかけべえ筈がねえだ。うんにや、己お前らを感然さうだと思はねえぢやねえけんど、

何ほ慙然さうだつて、人の事よか我事だ、お前ら其様云ふけど、まア、考へてみさい、此様して別れるな、喧嘩のうして別れるよか餘程好えでねえか？ お互に心のう打撒けて、得心づくで綺麗に別れるだもん。己ア己の好にしろ、お前らお前らの好にしろ、手々に運次第成るやうに成つて行くだアから、何も彼此言ふこと些だつてねえ。さあ、もう一遍吻さおツ接げべえ、持つて来う。」

接吻の音、それが木の葉のさらさらといふ友摩の音に紛れる時、椋鳥の今は高らかに面白さうに啼くのが聞えて、水車場の蔭では鶏が頻に曉を報ずる。刻々に明放れて来て、四邊が段々賑になる。

「あゝ、私イ……後生だから、ねえ、後生だアから、私も一所に連れてツて呉んさいな。」

と又娘の口説く聲がする。

「あッ、あれだ！ まんだ聞分けねえだ。もう些とンべえ道理え分る女ツ子だと思

つて、吻までおツ接けて可愛がつてやりや、好氣になつて凭懸るだ。矢張女ツ子は女ツ子だア！ いつでも此様何だ角だ愚痴べえ吐いて、手の甲ばう擦らせるだアから、はア、不可。」

「だつて私イ人間だもん、其様雑作もなく分れること出来ねえと思ひなさろ。」

「何だつて？ だら、己何だツべえ——犬だアかね？ お前ら其様思つてるだか知んねえけど、だつて、元々好合つたアから、情人になつたんでねえだか？ だら、別れる時節ウ来たッ、清く別れるが好えだ。お前らも未だ若い事だし、己だつて最ツきし嫌ぶツ了ふ氣いねえ。そんだアから、お互に邪魔するな好くねえ。何でも關んねえだから、手々に腹一杯のさばるが好えだ。そりよお前らツたら、何ぞといふと直き泣顔べえ作るだ。悪え癖だ。それとも既う己の吻の味忘れたッか？ ほんに耐へねえ女ツ子だぞ……さア！」

と又しても接吻、又接吻。其合間には息氣をさへ逸ませて切なる情を囁くやら、

深いく呻くやうな溜息を泄すやら。

忽然として木々の末も空の色も、總じて其處ら中が一體に赫と明るく鮮やいて、笑でも作つたやうに見えたのは、朝日影が始めて地に落ちたのであつた。其時しゝ夢の底より園も覺め來つて、夜の明けたを悦ぶやうにさわめき立ち、いろくゝの物の香を孕んだ風がそよると吹いて通る。

天地の間に一本立の、身に露ほども弱點を知らぬ、粉挽男の甲高い能く通る聲と、綿々として盡きぬ恨を訴へては、動もすれば呂に落つる娘の聲とに聽入つたチホンは、これに紛れてか、稍胸の痛みの薄らぐを覺えて、

「へッ畜生旨くやつてけつかる」と内々羨む心も出る。

粉挽男が何の苦勞もなく氣隨氣儘に世を渡るも羨ましく、自ら省みて以處が疚しいとも覺えぬその氣の安さも羨ましかつたが、さてその羨ましかつたのが心恥かしくなつたでもなく、又他人の内所話を立聽したを後めだく思つたでもなくて、何と

やら尻こそばゆくなつて來たので、衝と起上つて太息つき、家の裏へ引返さうとすると、

「モトリヤよ、もうおさらばだ。仕事に掛る時分になつたと思へ。そんだら屹度約束通り來るだよ。」

「來る筈ぢやねえけど、私や來ずにやア居られめえ。ほんに考へてみると、汝や憎らしい人だアよ。」

と呻くやうに言ふ。

「そんねえ言ふねい。日數せへ經ちや、泪も乾くだ。まんだいよく別れる迄にや間の有る事だアから、何ほでも逢へるだ。なア、逢に來て呉れべえな。そんだら、急いで歸れエ。」

簾々と背後に垣を潜る音がして、それから鼻歌になる。

「風になりたや、野良吹く風に、草をなぶつて……おツと、旦那どのだア！ お早

くござりやす。」

チホンは帽を脱いで、稍狼狽氣味に後を振向き、

「好え日和だの。」

といひつ、粉挽男の様子を見れば、堂々と憚氣もなく直立つたなり、赤襦袢の胸をはだけた隙より、岩盤な浅黒い肌を見せ、寛かに深く呼吸し、冷笑に赤毛の髭を靡かせる時は、白く細かき齒を微見せ、大きな目を細うする時は、人を人とも思はぬ氣で、傲然たる其氣位に、チホンは如何やら吞まれさうになつて來たから、粉挽風情に弱味を見せるのも残念と其儘其處を逃出したくも思つたが、

「相變らず夜遊べえしるだね？」

「閑で氣さへ向きや、夜遊だつて爲ざらにや、其代拵ぐ時分にや、えつと拵ぐだアからね。今日は誰がのを遣りますべえ？ 和尚様の燕麥のう掛けべえかね？ そいから磨だアがね、早う何とかして呉れツしやらねえぢや、不好と思ひなさる。」

あに、あの磨は喰はねえでねえ、がい喰過るだ。挽割にしべえとつて浚へ込だやつが、みんな、お前、粉になつて了うだもん。」

「心配しるでねえ。其内に何とかしべえわさ……」と言つたが、後段は言ふ氣もなく、つい「今あの腰掛で聞いてたら、汝……へえ……何處の娘だか知んねえが……汝、へえ、隅っこに置けねえ奴だアな……」

「へ、へ、珍らしくもねえ」と苦笑とする。

「これまで汝に疵物にされた女ツ子も數多いこと有るだんべえの？」

「ついぞ勘定した事ねえだから、幾人だか知んねえけど、己何も女ツ子疵物にした覺えねえだよ。己が關つたとつて、一人だつて跋にも雙眼にもなつた者ねえだアからね。」

「そりや然うだけんどの……汝、まア、一體女ツ子を慇然さうだと思はねえだか？」
「慇然さうでねえ事ねえね。慇然さうだと思ふけど……人の事よか我事だアから

ね」

「だどつて小兒出来たら如何しるだ？ 出来た事も有べえがの？」

「如何だかね。有るかも知んねえ……」

粉挽男は小蒼蠅なつて来たものと見えて、一寸足を踏易へたが、忌々しさうに口を結んで、クウと咽喉で奇聲を發する。

粉屋は此様子を見て、乗地になつて、此度はしかつべらしく眉さへ寄せて、

「有るかも知んねえでねえ。冥利を如何しる？ 冥利が悪いでねえか？」

「何でね？」

「何だつて、小兒出来た者見てやらねえでは、濟まねえ。」

「だどつて小兒はどうせ出来るもんだ、亭主持つたとつて出来るし、通り掛りの者と相戯したとつて出来るだ。」

とブツと唾をして對手にならぬ。

「うんにや、然うでねえ。亭主の子だら、これ、今日世間晴れての子だアから、構んねえけど、汝が子は然うはなんねえ。若しか相手の女ツ子が小羞かしいとつて、出来た子を何處かの池さおッ陥たら、如何しる？ そんでも汝濟まねえと思はねえだか？」

と唇に懸つて極付ける。極付けるのが何となく自分の心床しにもなる。

此時粉挽男は眞面目くさつて、卒氣なく、

「旦那、お前様其様言はツしやるけど、何でも人間の爲る事ア、根抵まで考へて見ると、みんな濟まなくなるだ。何ぢよをしても、角ぢよをしても、と手を左右に振分けて見せて、みんな濟まねえだ。饒舌つても濟まねえ、だんまつても濟まねえ、爲ても濟まねえ、爲ねえでも濟まねえ、如何したッ好かつべえか、がら解らなくなつた了つた擧句の果にや、山寺へでも駆込む外、爲べえやうが無えやうになるけど、己坊主になるな厭だからね。」

二人とも口を噤んで了つた。朝のうそ寒さに粉挽男はぶる／＼と身震ひする。チホンば歎息して、

「クジマよ、汝、ほんに、苦が無くて好えだな。ほんに汝が一生は軽い浮世だ。」

「さうだね、別段愚痴イ漏すべえ事も有りましねえ。」

と肩をもぢく／＼させる。

「世の中が面白かつべえ……そんたら、もう往ぎて仕事始めるが好え。」

「だら和尚様がのを掛けるだね？」

「然うだ、和尚様がのを掛けるだ、己も後に行ぎて見べえ……ほんに理窟を言やア其様したもんだ。何ぢよを爲しも濟まねえ……成程な、それに違へねえだ……ほんに、汝が一生は軽いだな……寢然石鱈王見たいな浮世だア。」

「さうだね、まア其様した物だかね……」

と熟と旦那の顔を視る。

「石鱈玉に違へねえだ。ほら、ミチカが能く薬屑で吹いて拵へるたんべえ——あれだアよ。真圓けな玉になつて、ブツと飛ぶだ、ふうわ／＼飛んで行く中に、又ブツと爆るだ。」

粉挽は莞爾となつて、

「面白え喩だア！」

「あれに違へなかつべえがの？ そんたら、汝如何でも暇さア取つて行くだかや？」

「行きますすべえ。」

「何處へ行くだ？ 辛抱して居ろ、給金のう増してやるべえわさ。」

「給金欲しくねえだ。己もう此土地に鑿いたから、何處へなと如何しても行がざらにやア。」

「己汝に暇やりたくねえだ。汝好え職人だアからな。」
と少し鬱ぎ氣味になる。

「だとして、己もう暇貰ふべえことに極てるだもん。何でも、はア、曠野の方さ行きて、思ふさま野良かわかざらにや——えッ、早く行きてえ！ そりやね、己だとしてお前様に別れたくねえやうな氣もしる——久しい馴染だアからね。だとして己如何しても行きてえんだから、暇貰ふ外爲べえようが無えだ。我が行きてえと思ふもんを、我が心と喧嘩のうして、辛抱してるでもねえ。我が心と喧嘩したとつて詰んねえだ。」

「さうだ、全く然うだよ、クジマ」とチホンは如何してか、サツと赤面して、熱と目を瞑つて、頻に頷きつゝ、「己矢張り……その喧嘩のうしてらだ……」

「旦那どんや！ 茶ア入つたから、飲みにござらッしやいやし。」
と何處でか女房の聲がする。

「今行ぐだよ。そんだら、汝も行きて勉いで挽いて呉れッせえ。」

粉挽は横目で瞥旦那の面を掠めて、口笛吹きながら向うの方へノツサク。

四

廣やかな小綺麗な座敷の窓寄りの處に卓を据ゑて、其上に湯沸を載せてあつたが、折しも湯の沸る音が頻にして、傍に白麵包の圓きもあれば、乳壺の突兀たるも見える。女房はその卓に對つてチンと坐つてゐた。無病の身なりや肌の色も艶々と潔くて、見るからに邪氣が無さうではあり、座敷一杯に射込んだ日影も、朝の事ゆる悪暑くもなくて、こいつも萬更厭でもなかつたが、

かゝるところへチホンのツそりと、前歯で髯を噛みく、座敷へ入つて、卓の側へ来て、兩手を背後で組合せたまゝ、小六かしい面をして熱と女房の背中を見詰ると、

女房はいそくと願視つて、莞爾となつて、

「がいに早う起きさしたつたノシ。昨夜また目え合はなんだのけえ？ 何か薬でも服

ましつたら、好かんべえにね、私イ何だか、はア、心配になつて……」

「心配になつたから、昨夜は吹簾に雇はれて、終宵火イ吹いたか？」と亭主は冷笑して、「おら何故彼様にグウスラ〜いうだかと思つたら、心配して火イ吹いたか。」

「何言はツしやる、此人は……そんなでも久振で笑顔見るだよ。此頃は笑顔が逃亡でもしたやうに、莞爾ともさツしやらねえだもん。始終小六かしい面べえして……」

「此様した日を送るだもん、笑顔も出来ねえと思へ」と小聲になる。

「何か商賣に手違でもはだかつたかノシ？」と女房も心配さうな面色になる。

「うんにや、然うではねえけど、麵包ばかりでは活きねえと、お經の文句にも有ツけえが、ほんに其通りだよ。ふツと魂がこと氣になり出したら、それからといふもんは氣べえ鬱いでく、はア、如何にも斯うにもなんねえと思へ、魂の仕末を何とかしざらにや、いつまでも治る事でなかつぺえ。あんまり毎日々々碌でもねえ事

べえ考へたのが堆積つて、腹中塵溜のやうになつてるだから、魂どの塵の下に敷かつて臭氣が出来ねえ、そこで此様呻吟り出したんべえと思うだ。」

「そんだったら、お寺様へ何か獻けたら好かつぺえ、そしたら氣イ安まるだんべえ」と此女房飛だ思付を言ふ。

亭主は之には答へず、熟とそのお寺の和尚さんの事を考へ出した。此奴なかくの慾心坊で、チホンが界限の百姓を對手に一儲やらうとする毎に、此坊主が邪魔を

入れたことは是迄に何度といふ數を知らぬ。

「でなきや、誰家かの親無しツ子引取つて、世話してやつたらノシ。」

「さうだ、それも好かつぺえ、差詰チャビルキンが所に一人有ツけえの。」

「茶アもう一杯飲まツしやらねえか？ 何故コツプに蓋して了つたね。」

「もう飲みたくなえだ。」

と熱と女房の面を視た。でぶくと膩きつてゐて、思倣しか、氣障な、間拔な女

に見える。何を始終ニヤリ／＼してけつかるだと腹の中で。

「それはさうと、矢張醫者様に診て貰ひなしたら、好かつぺえがね。呼びにやるべえかノシ？」

「えい、小蒼蠅！ べえらく／＼と能く喋舌る老婆だ」と突慳貪に吐飛して、次の間へ出ると、其處の板の間に悴が眠てゐる。黒い毛の茸々と生えた頭を枕に埋めて、搔卷を踏退けた其寢姿を、枕元に立つてつく／＼と眺めれば、小兒の日焼のした頬に額に、小さな汗の王が浸出んでゐる。

「何といふ寢様だア、これ！ よく眠くさつてけつかる。あゝ、貴様も今に成長くなつたら、如何なる事だツべえ！……」

「旦那さアよ！ クジマどんが呼ばつとりますだアよ！」

と挽割小屋から呼立てるのは缺唇のマルファである。もう去年の事、粉屋は大した悪氣もなくてツイ此娘の一家に離散の憂目を見せたことが有つたが、それを其聲

を聞くと偶然憶出した。此娘の親父のフオマーといふのが、何方へか出稼に發がけに、粉屋の門口に立つて。

「だら、何としても日延は叶はねえだね？ 叶はねえんだら、叶はねえでも好えだ。そんだら、旦那、随分達者でゐさツしやりやし。善えも悪えも、神様がチャンと見てござらツしやるだ。永い間にや、己達に泣をかけた報いで、お前様も泣かつしやることが有んべえ。そんだら是でおさらばだア……」

とは言ひながら逡巡と、背中を搔いたり、横腹を搔いたり、容易くは門口を去りかねて、難ましかけな面して一ツ事を五たび六たび反復してゐた其様子が、流石のチホンにも哀れと見えないでもなかつたが、

「如何しても日延は叶はねえと言はツしやるだアね？ そんだら、これ、はア、如何仕べえようもねえけんど……」

と何度めにか言つた時、到頭逐ひこくツて了つたのである。

「生きてると、種々な事に撞着るだ。その中にや、そりや些、とんべえ不正事も、有るべえわさ。だとつて、そりよを厭つてた日にや、人に馬鹿にされるだもの、仕べえようがねえだ。」

と今さら理窟を附けてみたが、それでも如何も安心がならず、思案に思案が込合つて、段々胸に餘つて来る。

「ヤムキさ往きて見べえ」と端なくも決心して、ここら、マルファよ、エゴルに馬車の支度せえツてツて来う。」

挽割小舎の入口には、粉だらけのクジマが口笛吹きながら、美しき雨雲の夏の日の爛々しきに競ひ負けて、次第に淡く成りゆく空を眺めてゐるが、小舎の中ではがたくと何やら頻に軋む音がして、屋後には水車の響が轟々と、水の潑ること銀の珠を飛す如く、其處ら中何がなしに切なさうに動搖む中に、麥の粉の淡烟糝糊として空に立迷つてゐる。

「旦那様よ、繩アおツ切れさうで成んねえがね」とクジマはぶツと向うへ唾を吐く「家婦さまにさう言つて、新しいがのと取易へて貰はッしやい。扱が行ぐだかや？」と言つて了つてから偶然氣が附いたが、雇男風情に此様にやさしく物を言ふのは、會つて覺えのない事である。

「さうだね、磨は仔細なく回轉るだよ」と答へて、クジマは旦那の舉止を額越にぢろくく視てゐる。

「だら、はア、いざござねえだ。磨は回轉ると、ソコデ汝は石鹼玉のやうだと、なア、然うでねえだかや？」

「石鹼玉だら、石鹼玉になつとるべえさと、澁々同意して、餘計なお世話だと言ひたけな身振をする。

「軽い一生だア、ほんに……」

「重くしたとつて、仕様がなかッぺえがね。」

「全だ」と粉屋は歎息した。

クジマには何やら澤山問ひたい事の有るやうな気がすれど、それを如何言つて問うたら好いか、さッぱり分らぬ。さればと言つて、いつまでも斯うして押黙つて萎れてゐては、第一雇人の手前主人の威光が薄れる道理。えいと思切つて、

「だけんどなう、若しか……ひよつと……お迎へが来たッら、汝如何しる？」

「お迎へが来たッら、おッ死ぬばかしでねえかね」とクジマは愈怪訝な眼色になる。

「ふうむ。だら他の者は？」

「他の者だつて如何すべえ、お迎へが来りや皆おッ死ぬだ。」

「さうだなア」とまた歎息して、「そりやそれに違へねえ、皆おッ死ぬだ……人間と

いふものは儂ねえもんだノシ……」

クジマは髭をむづ／＼させて片手の指先を赤毛の髪に突込み、片手を袴子の衣兜へ入れ、足を踏みかへ、突然顔中を笑傾けて、

「旦那、お前様町さ行きだら、思ふさま酒でもかつ食つて、一騒ぎやつて來なさろ。そしたら、些た氣イ霽れべえ。お前様の氣は鯉肥料見るやうに、がら腐つたつてるだアよ。」

と旦那の肩をボンと叩いて、呵々と高く笑つた。粉屋は不意を食つて、度を失つて、主人の威光も何も没して了つて、與太郎といふ所を徹々と笑つて見せたが、それと同時に心中では大方ならず癢に觸るのであつた。

「何言くだ……飛でもねえ！ 己ヤムキへ行くだよ。ヤムキサ行き……先生の家さ行きよ、モノ……話して來べえと思つてるだよ。」

「行がツしやい。ヤムキにやヅナーシヤ女郎も居るだ。彼女ツ子と話べえしたッら、お前様の屈託も火イくべた蛋だア、ブスツと云つて跡方もなくなるべえ。」

と逃げて行く主人の背後から、クジマが浴せかけるのであつた。

それよりして五分の後、肉附豊かな栗毛のルキチが、土柔かなうねく道、右より榛の樹雪の花など蕪餅と生茂つた中を、見事な並足で大刻に走り行く姿を認めた。撓くとした樹の枝は頭に觸れ、面を摩り、時としては木の葉を舐らせることもあるので、其度ごとに粉屋は頸を反しつ、唾を吐きつするが、それでも尙ほ且つ搖ぎ出した玉の緒のことは忘れずして、頻に吾生の日に非なるを歎ずる。何故に非なるか、其處のところは能くは分らぬけれど、唯何がなしに非なりとのみ感ずるので。

浮世は誰も同じ浮世であれば、世間の人のやうにさへしてゐたなら、異もないものを、偶然慈ひに物など思ひ出した爲に、世の中の事皆顛倒して了つて、黒白の辨別もつかぬ今日此頃。

思案に不向の人の頭に、思案は潮の如く湧起つて、綾もなく狂ひ廻る。どの思案も、どの思案も、此人には珍らしい思案、ついぞ喰附けぬ思案で、トント勝手が分らぬ。あゝ、心に掛る雲もなくて、苦勞といふことを知らなんだ、安らかな昨日の日の、今となつては坐ろに偲ばれて……

憶ひ出づれば、晩の茶を喫べた後には、往々家の入口の階段にうんとこなと腰を卸し、「世界一周記」を繕けて、其中の可怖い物語をミチカに讀ませて聴くことがあつた。其時右には妻、左には女と、うからやからに圍繞れて、しつとりとしめやかに、何とはなしに物の懐かしいやうな氣がして、心は廣く體は胖かに、思ふ所とては更にないのであつた。その席へ折節には面白い繪の持出されることもあつたが、畫面はまづ無性に引搔廻したやうな大きな葉の木立兩三本あつて、其蔭に一條の川が流れ、末は遠く茫々たる野に入つて見えるけれど、其野は此國の野のやうに、荒涼と人氣離しても見えず、何やら床しい野か何かで、家内中打ち寄つて之を評する

やうは、あゝ、こんな處に水車場を建て、みたいと。で、かう思ふ所を口へ出して
了つた後は、皆が再び温かに柔かな羽布團にでも包まつたやうな心地になつて、も
う物を言ふことも厭になり、相對して黙々と身動き一ツせず、いつまでも此儘に
居浸つてゐたいやうな氣のしたことのあつたツけが……

やれ、もうヤムキが見え出した。其昔誰やらが、白舎、納屋、牛部屋などを、
無雜作に其様の岡の上に撒いたのが、家並を揃へる勢もなく、其儘へたつて霜氣
て了つた、とでもいひさうな、汚なげな見影もない瘦村であるが、蒼々茫茫たる無
邊際の大空が、萬古の幽意を中に湛へて、坦然として愛憎氣もなく大様に其上を覆
うてゐるので、いと、瘦村が更にいよく哀れに見える。

チホンは行くく。

「これでも矢張人間の住家だ。建前といつたら蚊の巢にも劣るべえが、此様した
見とむねえ家にも人が住つてゐるだ。やれ、ルキチよ、勉えで走れえ。

かうして先生が所さ行く……何しに行く？ 話イしに行く。それ一段の事だツペ
え。ところで、何の話するだかといや、先生め屹度己を吐責るだ、まんづ「お前ら
些た魂の事も思へ」と來る、而して己があくぞもくぞを並べるだツペえ。己アそり
よ聞いて、格別腹も立てねえで、遠慮なく言つて呉れツしやい。成程己が悪かつた。
お前さあが新聞に出した通り、己全く彼衆に一杯喰はしたに違へござんねえ。そり
や彼衆だつて、己に熱湯を飲ませたことが無えでもねえけれど、彼衆は後にも前
にも唯一度だ、己三度やり申した。新聞に出すんだら、出しても好くござる、遠慮
なくやらツしやいだが、爰に一ツ其前にお聞き申すべえ事がござり申す、己是迄何
をしたとつて、何とも思ひましなんだが、此頃はえら氣になつてなりましねえ。こ
れ一體何とした理窟でござりますべえ？ これが人間の極文句だツペえか、それと
も己が迷だツペえか？ 人間は誰も此様したもんだら、すべえようもござんねえけ
んど、若しか己が醉狂でもつて、爲でも好え苦勞をしるではなかつペえか？——て

て……

「やれ、ルキチよ、かせえで走れえ。」
 ルキチは埃に噎せては鼻嵐を立てく、首を振りく、見事な足掻で罪の深い主人を挽きつゝ、急げば聽てヤムキに着く。

とかういふ中に、もう此處は學校——とは名ばかりの、實は鷺鳥の小舎を顛覆したやうな破家。三所に開けた窓の其一ツの窓際に、先生腰を掛けて、ナイフで何か細い棒のやうなものを削つてゐられたが、馬車の音に顔を舉げて、粉屋を見ると、急に卒氣のない面色になる。

「先生、今日は！ 私イ話イしに來たでがンすが、お邪魔だツぺえかね？」
 「まア、上んなさい」と窓を離れる。

言語も冷淡なら、瘦削た顔も稜々として莞爾ともせられぬ。粉屋は出る端を弾かれて、もう厭な心持になつた。

手綱を御者臺に綁付けなど、馬車の始末に久らく手間取つてから、入口へ廻らうとして、一ツの窓下を通ると、先生が何やら分厚の書物を書棚へ納れながら、苦い苦い笑をニヤリと漏すのを認めた。

「やれく、がいに暑い事でがンすな。」

と粉屋が無理に去氣なき體を作つて、先生に握手を求めると、先生は黙つて骨ばかりの冷たい指先を粉屋に握らせて、顛で腰掛を示して、ぶツきらばうに、

「掛けなさい。」

「そんだら……」と粉屋が腰を卸した腰掛は、今の前まで先生が掛けてゐられたそれで、先生は今背後で手を組み、咳をしいく、部屋中を歩き廻つてゐらるゝ、而も其足取が刻々に早く成行く。

客も主人も口を噤むで一語をも吐かぬ。粉屋は腰を卸した儘、悠然と左手に膝頭を摩り、右手の指先で髻を搔撫でつゝ、熱部屋の光景を視れば、出口は兩處にあつ

て、一ツは入口の土間に通じ、一ツは掘立小屋めく豁然とした教場へ出る。卓一脚に椅子二脚、それに寢臺に、書棚に、今吾掛けてゐる椅子代りの木の切端と、此外に家具らしい物は一ツも見えぬ。この哀れな光景を見て、粉屋はつくづく感心してゐると、先生は書棚の側へ行つて、其處の書物を眺め出す、今迄通り其處に書物があるか無いか念の爲檢べて見るといふ面相であるが、いや、どうもその手持無沙汰なこと！ 手持無沙汰だと思ふと、尙ほ手持無沙汰になつて、黙つてゐるのが、双方共に段々辛くなつて來た時、

先生は衝と書棚を離れて、客の側へ來て、直と其顔を目守めて、

「何か用が有んなさるのか？」

と言はれたが、其顔を視ると、額を皺くちやにし、眉を險しき八字に寄せて、咳がしたかつたのを何故か口を結んでウツと押耐へたので、見る／＼面上處々朱を注ぎ、元來は瘦せて凹込んだ胸を今は鳩のやうに膨ませて慄へてゐる。

「えゝ……ソノ……」と粉屋は有らぬ方へ眼を逸して、心中に、

「目も當てられねえだ……おツつけ咳の咳仕舞になるべえ……」

町で立派な紳士が弔詞を演べた彼釘のやうな瘦亡者が憶出される。

「格別用というでもねえけんどね……ソノ……」

と口には言ひながら、心の中では尙ほ思ひ續ける、

「此人がおツ死んだとつて、誰も弔演説なんぞやつて呉れる者も無かつべえ。大方誰も介抱し手もなく、一人ぼつちで何時の間にか斃たところを、小前の奴等が寄つて集つて、穴さかつ掘つて埋めツ了ふだけの事だツべえ。矢張始終書物べえしてるけんど、何しても脾弱だアから、駄目だア。書物べえしてるながら、田舎なんぞに引込んで……其は好えが、何と口を切つたもんだツべえかの？ はてな……」

「茶でも飲みなさらんか？」

とばかりで先生、耐へ／＼し溜咳が一度に関然と破裂して、胸を抱へて咳入られ

る。面色は土の如く、海老のやうに二重になつて、せい／＼ひゆ／＼言はるゝ所は、胸に古手の柱時計が藏してあつて、それが今しも時を打たんとするやうな騒ぎ。」「雑作になりますべえ。だが、先生、えら咳イ出るだね。何故そんなえ出るだツペえ？ 今は夏だアから、温けえだがね。」「ナニ出る時にや、何時でも出る。」「

と先生はドツカリ椅子に腰を落したが、其言葉には大に心細い響がある。出る時にや出ると、何の意味をも成さぬ陳套の此一句話にも、水の如き鬼氣は自ら含まれて、冷りと人を襲うの感があつた。

「イワーノウナ！ 茶の支度してお呉れ！」

と先生が窓を隔て、呼ぶ。聴て入口の土間に當つて、鐵の火氣に鳴る音が聞える。是は湯沸の筒の鳴る音と、粉屋には問はずともツイ分つたが、さて何から話を始めたものか、それは今だに分らぬ。

先生も黙つて、眉を寄せて、直と板の間を見詰てゐる。又無言の行が始まつて、いつ果つべくも見えぬので、客も主人も共に焦ち心になる。

「筒が落ちちたんでねえかね？」

と粉屋が注意すると、先生は起上つて、部屋の出口まで行つて、

「イワーノウナ！ 筒が落ちたやうだよ。」「

「知つてるだよ。己先刻から此處に附いてるだもの」と不満の聲が聞える。

湯沸の筒の落ちた一件は、端なくも主客二人の心を壓する壓石の石を取除けたやうな氣味があつて、先づ先生が横腹を摩り／＼、

「ぢや、何かソノ……私に話が有んなさるんだね？」

「でがンすよ」と粉屋は首肯く。

「よろしい！ 私には何の話だか分つてる……」

「だら、當てゝみなさろ」と粉屋は眉を釣上げて、胡亂さうに微笑とする。

「無論私が貴公の事を新聞に投書した一件だらう？」と先生は眉を寄せた上に、何故か故意ムツと頬を膨らませて、眼も口も一ツになれと澁面を作らるゝ。

「大方然うだんべえと己も思つてた。どうもお前といふ人は、どうも……酷い人だ……」

これがまた案外だと見えて、先生眼を圓くして、熱と容の面覗込みながら

「貴公も然う思つてた?」

「さうとも! 吃度お前の細工に違へねえと思つてた。何故ツてみさい、此界限で彼様した事書ける者は、お前とアレクセイの和尚の外にや、一人だつて無えだもん。和尚も矢張己が事で怒つてる事あるだ。」

「矢張とは妙な事を言ひなされる。ぢや、私が何か怒てる事があつて、それで彼様な事を新聞に投書したんだと思つてなされるのか?」

「でなくつて何としべえ?」

「何で私が腹を立てる筋がある?」

「そりよ己が知るもんか! 彼様した事新聞に出したなお前らの細工だら、お前ら己に何と言はれたとつて、仕方ねえ理窟でねえか?」

「こりや怪しからん! 私は何も貴公に對して思も仇もない、唯義に由つて男氣で新聞に投書したんだ!」

と先生はわななくと、烈火の如くになつて辯駁して、更に一段聲を張揚けて、
「私が怒つてる事が有るから新聞に投書して仇をしたなぞと、そんな事を言はれては聞棄にならん。怪しからん事だ?」

「理窟は如何にでも附くもんだノシ」と粉屋は一向受けぬ氣に、「だから、腹ア立てねえもんだら、何故己が事を新聞なんぞに出した。ね?」

「そりや貴公がキリシヤンスコエ村の百姓に對してソノ……不都合な事をしたからだ。」

「何だッて、己が不都合な事をした？ だら、己が所の土手の打切れた時の彼奴等の仕草は不都合でも何でもねえだかね？ お前ら其事は新聞でこれッばかりも噂しなかつたでねえか？」

「け、ま、ま、怪しからん事を！」

と先生は益々奮激して、満面に朱を注いだ。言ひたい事が込上げて、何から言つて好いか分らぬので、ど、ま、吃らるゝ。妙なかなや、此時先生の耳は痙攣を起す、眼中には異様な光を湛へる、瘦削けた神経質全露の面は七面鳥の如く見る見る變る。粉屋も其様子を見て煮え出す。

「何が怪しからん事有るもんだ！ 己が事を新聞に出すんだら、何故彼奴等の事も出さねえだ？ 己が不都合だから彼奴等だとして不都合でねえ事は有んめえ。そりやお前らも現在見て知りてる事だ。そんだに、お前らッてッたら、彼奴等の事は臆にも出さねえで、己が事ばツか新聞に出しといて、それでお前ら何とか言ッたッけ

ね——男氣で出した。へん、へんてこれえな男氣も有るもんだア。」

「ふむ、それから？」と先生後を催促したが、思ひきや二重になつて咳込みながら、急いで、周章て、亂次な言を、矢續早に、

「誤解にも程がある……私がそんな……假にも私が……怪しからん疑を！ 積りにも、ま、知れたもんだ、私が何も貴公を憎む理由が……イヤ有るく、有るとも！

一生憎む理由がある！」

と突然大聲になつて喚かるゝ。

「さウら、到頭本音を吹かした！ そんだのに、男氣で新聞に出した！ 己が憎くツて、彼様した事新聞に出しといて男氣もねえもんだ。呆れて物が言はれねえた此事だ。明日にも知れねえ身體しとつて、お前は何で其様罪イ作りてえだ。お前ら彼様した事新聞なんぞへ出すもんだアから、己女の手前言譯に困つたでねえか？ 現在の女の前で親に小恥か、して、其で濟むと思つたか？ 己の何處が憎くツて此

様した目々に逢はせるだ？」

「黙んなさい！」と先生は怏へ切れなくなつて大喝した。「貴公の女が如何しよう、其様な事私の關係した事ぢやない！ 私は何も貴公一人を憎むとは言はぬ、貴公等の仲間全體を、階級を憎むのだ。」

「小理窟は捻らねえもんだ。何と理窟捻つたとて、お前等が腹は己にやチャンと分つてるだ。」

「どうも實に……私や何も……貴公は無暗に人を疑ぐるとは、無禮でないか！ 私の書いた所に間違つた點があるなら、さうでないといふ證據を出しなさい。反證を擧げて辯駁さつしやい。反證も擧げんで、私に對して其様な事を言ふとは……」

「己が何よ言はうと、言ひてえ事言ふに、何の文句がある？ かう見えても、この己はな」と碯と胸を打つて起上り、居丈高になつて「粉屋のチホンだぞよ！ この十里四方に己を知らねえ者は一人も無え筈だ。これでも些とンベえ人に尊敬られて

る親仁だと思へ。汝は何だ、一月コキ使つて僅だ十八兩の人間でねえか……」

「だ、だ、だ、黙らつしやい……」とばかりで先生が地團太を踏み、總身を慄はして絶入るばかりになられたのは、業が煮えるためのみでなく、一ツには咳が込み上げて來たのである。ごほんくと咳込ると空気が出拂つて病肺に刺すが如き痛疼を感じるので、先生脊を圓くして呻聲を漏してゐらるゝ其前に、チホンは勝誇つて傲然と突立つてゐるが、シカシ大に敵を哀れんだ形もある。激昂して、眞紅な面して、

炎立つ自是心自恃心を甲高の聲に響かせつゝ、一語々々明かに句讀を切つて、
「かうら、男氣の先生、能く聽かつしやい。お前は人は罪に陥すべえとつて、手前の口から手前の罪を歌つてるだよ。そんなもお前は先生だか？ 己お前をもう些とンベえ話せる人だと思つたッアから、話しに來た。此頃は氣べえ鬱いでなんねえで、お前らと一ツシンミリ話しべえとつて來てみりや、如何だツペえ。新聞に出したなお前らか、ツていや、己だが何としたと吐く。何としたもねえもんだ、彼様

した事出しといてえ！ だがお前らが折角かせいで新聞に出した事、一體誰が讀んだと思ふ？ お氣の毒だが、此界限で和尚一人外讀んだ者は無えぞよ、己が身にや些だとして障つてねえ、チホンは矢張舊のチホンで、相變らず粉屋の旦那どのだア……己喧嘩すべえとつて来たんでねえ、お前らと仲善く話すべえとつて来たんだけれど、お前らがやうに其様手前勝手ばか吐いて怒罵りや、己だとして黙つてられねえ。怒罵る格式が有るもんだら、怒罵けて見い。一月十八兩ばかりの目腐金貰つて木から落ちた猿のやうに便りねえ身で、碌でもねえ事ばか爲てえて、そんで男氣が聞いて呆れるだア……己もう行くべえ。お前らがやうな者に何よ言はれたとつて、己別段腹も立たねえけれど、己お前らが不便だ……不便でなんねえと思へ……そんならもう行くぞよ。考へりや、お前らが身の上も慇然さうなもんだけれど、人間といふもんは何時か一度はおツ死ぬもんだ……そりよ忘れてはなんねえぞよ……よし、理解が分つたか？……」

といふころには粉屋は泪指ぐまると程、世を味氣なく思つたのである。先生はいふと、又咳が込上げて来たものか、椅子の儘丁寧にお辭儀したやうに屈むで了ひわなくと身を慄はし、片手で脾腹を抑へ、片手で斯う空を搔廻すやうな眞似をしてるらるゝのは、大方粉屋が止度なく饒舌り立てるを止める積なのであらう。之を觀れば、粉屋も流石に哀れを催さぬでもなかつたが、それでも尙ほ何か斯う更と斯う身に浸る程情ない言をいつて、此先生にも矢張浮世を憐がらせてやりたい。やりたいとばかりで、其言草が見附らぬ。言草は見附からずして、唯聲ばかりが慄へて濕ほい泣聲になる。總じて今日の會見は大出来損ひ、これでは互に益々氣味を悪くするばかりなので、粉屋は一刻も早く此苦しい幕を切上げたくなつて、「そんだら己もう行くべえ。此世は、へえ、仕方がねえ……未來はお互に仲善くすべえぞよ……」

と帽子を眉深にスポツと冠つて、倉皇として、戶外へ出た。

「待ちなさい〜」と背後に先生の激した皺鳴が聞える。

「これせへ解いたやら、もう此方のもんだ」と粉屋は口の中で呟いて、手綱を解きにかゝる。

「待ちなさい……言ふ事がある……」と先生框に捉まつて窓から半分身體を乗出して、熾に手眞似をやられる。

「言ふことが有るも無えもねえだ……やんがてお迎が来りや、人間皆……」と馬車の踏板へ片足掛ける。

「待ちなさいと言へば、待ちなさい！」と先生の聲は甲走つた。

餘り妙な調子であつたので、振向いて視ると、鈍い眼をして額に冷汗の玉を漲らし、喉頭は痙攣でも起したのか、縊付られたやうな恰好になつて、先生は怖ろしい業相を現はしてゐる。

粉屋は之を視ると、何やら胸を刺るゝが如き心地がして、

「又來べえさ……話は何時だとして出来るだ……」

といふが否、手綱を揮つて思ふさまルキチの首筋を引ばたく。タ、タ、タ、と馬は馬車を挽出して直ぐ駆足になる。背後から先生が尙ほ何やら頬にわめかれる。

「疾と、走れえ！」と粉屋は今一度ルキチをひっぱたいて切齒さへしたのは、込上ける悲しさを押耐へたのであるが。

村を出外れる頃には、稍落着いて來た。今年は麥の出來も好くて、一望十里穰々、と唯其穂の色が黄なる中を、逶迤と通る一條の田舎道、それを今ルキチは走つて行く。行手に當つて、天の一方に、先程から夕立雲が現はれてゐたが、斷つたやうな黒雲が、見る間にむく〜と左右より折累つて、重たさうな一團の雲陣を作り、眞黒になつて此方へ蔽つて來て、はや闇い影を地上に墜す。之を見ると、粉屋の心も急に闇くなる。去程に雲は次第に低く地に垂れて、今は行手に籬を据ゑるべく見ゆるので、粉屋は曲る氣もなく偶然左へ曲つて、車の轍の縦横についた廣い往來へ出

た。夕立雲は今ば右手に廻つて、行手に、麥の穂浪の中に、小さな薄闇い森が離小島のやうに見える外は、いづくも皆鮮かに日の射した麥畑で、それが一高一低して際涯もなく續く處々に、打返した畑の面が大きく黒々と劃られて、麥畑の色の豊かなるに對しては、是はまた哀れに淋しく佗しげに見えるけれど、それさへ今の粉屋の目には何となく懐かしいものに眺められた。麥の穂先が風にさわだつて、何をか空に囁く邊を、ルキチは直駈に駈けて行く。例の離小島めく森は次第に近くなり、今は麥畑の鮮かに黄なると、空の薄縁なるとを背景にして、其處の青葉の青さも明かに見分けられるようになった時、

「はア、こりや停車場道だア！」と粉屋は始て氣が附いた。成程然ういへば、岡向うに電線が一條見透されて、鳶色ペンキで塗つた線路の番小屋が土手の影に微見える。

「寧ろそのこと町さ行き見て見べえか？ 馬は停車場で誰ぞに頼んで戻しや、それで好

えと……さうすべえ。へん先生が所さ行き話して来た。何だ、先生もねえもんだ！ 小兒を集めて讀書べえ教へるばかりが能でねえ、自分も些た世間の振も見、修業したが好えだ。己唯だ懺悔話してえばかりで行きたんだ、でもなくって何で我様した人の所さ行くべえ。そんだら、お前らも、なア先生、お前らも其氣で、何ほ高え所に留りてえとつて、人が登くるに落こちて怪我べえしねえやうな處に留まるが好えでねえかね？ そりよ、お前らといつたら、小六かしい面べえして、畑突よか高え所に構込んで、其處からお説教だア、これ。ま何といふ氣だツペえ？ 己にや全然分んねえ。大方手前ぢや、己が善根を秤に掛けりや一ツ百貫目づゝは吃度有るなんぞツて、自惚れてけつかるだんべえ。己もツと散々ばら言つてやりたかつたけど、何と言つたら好かつペえか、言ふべえようが分んなかつたもんだアから、はア、不好だ。

考へれば考へる程、先生は正でない。先づ事の本末を言つてみようなら、かくい

ふチホンの氣では、彼人に彼様な事を新聞へ出されて、親仁大弱り、しかし全く親仁が悪かつたに相違ないと懺悔して、それで短氣な先生の心の角を折り、少しは氣の毒がらせてやらうで、實はあの投書一件の話を始めたのであつた。であるから、若し先生にして今少々手柔かに出られたなら、親仁は屈託の底を叩いて話をしたものを、それを先生と言つたら、卒爾羽を生して雲の上に舞揚つて了つて……と思ふと、チホンは無念でもあり、亦情なくもなる。

「え、人間といふもんは！ 手前の用の無え者や、怖くねえ者にや、唾も引掛けて呉れねえだ。そんで、先生だア學者だアとツて威張りこくるだ。よく出來てるだア、ほんに！ 大方彼衆にや、人の魂よか手前達の勿體の方が大事だツペえ……」

「今だ、今は思ふ事が樂に纏まるので、覺えず口走つて、」
 「今だ、先生、お前らの對手になるだ。今己が對手になつて理窟ウ捻つたら、噴嘩は何方のもんだか分んねえぞよ。」

岡の中からニヨツボリと出た停車場へ、ルキチが勇ましく駆付けた時、忽ち汽笛の響が空を劈いて、濛々たる白烟を毳の如く吐きかけ、向うから汽車が走り來て、そこらが暫らく動搖めきわたる。

此時雨雲は既に空を八分通り領し、雷鳴は雲を打抜き、落し來て、汽車の響に轟き合ふのであつた。それよりして數分の後には、粉屋は既に車室中の人となつて、野中を飛び行き、麥畑と打返し畑が窓外を走るのを眺めてゐた。

電光は火矢の如く頻に如法の闇を破り、雷は風の如く馳する汽車の上に鳴りはためく。鐵軌の接目で車輪の躍る音、連鎖の相觸れて鳴る音など、皆其般々轟々の音の中に没却して、電光の倏忽と車窓に閃く時には、眼も眩んとする想がある。

「己一體何處へ行く積りだツペえ？」と粉屋は腰掛の隅に小さくなつて我を異しんだ。

頭上は鳴る神の音空をゆすつて、西し東し縦横無碍に、はためき、轟き、暴れ廻